

第一圓ニ折算シテ之ヲ償ヒ罰金科料及ヒ裁判費用ハ之ニ相當ナル利金ヲ付シテ還付セシムルヲ允當ナリトスト論スルモノアリト雖モ余ハ此說ヲ採ラサルナリ何トナレハ其被告人ノ受ケタル刑ハ相當ノ刑ヨリ重キモノナリモ又罰スヘカヲサル被告人ニ對シ刑ヲ言渡シタルモ其判事等ノ故意等ニ出タルモノニアラサレハ之レニ向ヒ損害賠償ヲ請求シ得サルハ本法第十四條ノ明言スル所ナリ故ニ余ハ本疑義ノ場合ニハ其徵收シタル罰金等ハ還付セシムヘキモ其他ノ賠償即チ被告人ノ遺族ニ扶助料ヲ給シ又ハ罰金科料ニ利足等ヲ付スルカ如キハ決シテ爲スヘキコトニアラストス況ンヤ拘禁日數一日チ一圓ニ折算シ給與スルカ如キニ於テチヤ

〔參照〕舊治罪法

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリタル時

大審院ノ特別
權限ニ屬スル
訴訟手續
第三百十條

又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告ス可シ
〔注意〕舊治罪法第四百四十八條乃至第四百五十八條ハ概テ第二編管轄ノ章ニ移ツセリ同編ヲ照合ス可シ

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

第三百十條 裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テハ檢事總長其搜查ヲ爲ス可シ
地方裁判所區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ搜查ヲ爲シ檢事總長ニ報告ス可シ

〔參照〕裁判所構成法

第五十條 大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第二 第一審ニシテ終審トシテ

刑法第二編第一章及第二章ニ掲ケタル重罪并ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スヘキモノ、豫審及裁判

第三百十一條

(注意) 本編第三百十條ヨリ第三百十六條マデニ於テハ大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續ヲ特ニ規定シタルモノナリ

第三百十一條 前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急速ヲ要スルトキハ地方裁判所區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官ハ第四百四十四條及ヒ第四百四十七條第一項ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ爲スコトヲ得但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セス

第四百四十四條ハ地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審

第三百十二條

判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキ其旨ヲ豫審判事ニ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審處分ヲ爲スノ條ナリ 第一百七條第一項ハ區裁判所檢事其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキ豫審處分ヲ行フノ條ナリ

第三百十二條 前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ檢事總長ニ送致スヘシ

第三百十三條

第三百十三條 檢事總長ハ何レノ場合ニ於テモ其事件大審院ノ特別權限ニ屬シ且起訴ス可キモノト認メタルトキハ豫審判事ヲ命ス可キコトヲ大審院長ニ請求ス可シ

第三百十四條

第三百十四條 大審院長ヨリ命ヲ受ケタル豫審判事ハ豫審ヲ爲シタル上ニテ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ大審院ニ差出ス可シ

第三百十五條

第三百十五條 大審院ニ於テハ檢事總長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ公判ニ付ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ其事件地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノト決定シタルトキハ管轄裁判所ヲ指定シ其事件ヲ送致ス可シ若シ特別裁判所ノ權限ニ屬スルモノト認メタルトキハ決定ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ又第三百六十五條ニ記載シタル場合ニ於テハ決定ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ
第三百六十五條ハ豫審ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキ場合ヲ

規定シタル條ナリ

第三百十六條

第三百十六條 前數條ニ於テ特ニ規定シタルモノヲ除ク外豫審公判ノ手續ハ第三編第四編ノ規定ヲ準用ス
第三編ハ犯罪ノ搜查起訴及ヒ豫審ノ事ヲ規定シ第四編ハ公判ノ手續ヲ規定セリ

裁判執行復權及特赦

第八編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第三百十七條

第三百十七條 刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

執行トハ如何

(疑義) 執行トハ如何

(說明) 判決言渡ノ效果ヲ生出セシムルノ處分ヲ謂フ

〔參照〕 舊治罪法

第六編 裁判執行復權及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ后ニ非レハ之ヲ執行ス可ラス

第三百十八條

死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記録ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

司法大臣ヨリ死刑ヲ執行ス可キ命令アリタルトキハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

死刑ヲ確定判決アルモ直ニ執行セサル所ハ如何

〔疑義〕 死刑ハ判決確定スルモ直ニ執行セズ檢事ヨリ其訴訟記録ヲ司法大臣ニ差出ササルヘカラサルノ必要ハ如何

〔説明〕 司法大臣ハ特赦上奏ノ權ヲ有スルカ故ニ死刑ノ言渡ヲ受ケタルモノニシテ特赦ノ情狀アルトキハ司法大臣ハ之ヲ上

奏セサルヘカラサルモノナリ而シテ其情狀アリヤ否ヤハ訴訟記録ニ就カサレハ之ヲ知ルコト能ハス是レ其言渡確定シタルトキハ速ニ訴訟記録ヲ司法大臣ニ送致ス可シト規定シタル所以ナリ

〔參照〕 舊治罪法

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ

司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第三百十九條

死刑ヲ除ク外刑ノ言渡確定シタルトキハ直ニ之ヲ執行ス可シ

体刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ遁レタル者ニ對シ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ効ヲ有ス其闕席判

法ニハ豫審ニ關シテハ全法第七十一條ニ決定ノ正本ヲ檢事ニ送達ス可キ規定アルニモ拘ハラス公判ニ關シテハ右ト對照ス可キ法條ナシ但同法第二百六條ニハ訴訟關係人ヨリ其費用ヲ以テ正本若クハ謄本ヲ求ムルヲ得トノ規定アルモ本條ハ元ヨリ檢事ニ適用ス可キモノニアラス尙同法第二百二十八條第二百三十六條ハ欠席判決ニ限リタルモノナレハ要スル所對審ニ對シテハ裁判所ニ於テモ判決ノ正本若クハ謄本ヲ檢事ニ送達スルノ義務ナク檢事ニ於テモ亦之ヲ請求スルノ權利ナキニ似タリ加之ナラス檢事カ刑ノ執行ヲ指揮スルハ裁判所構成法第六條及ヒ本條ニ依リ當然自己ノ職權ニ屬スル者ナレハ其指揮書ニハ別ニ判決書ノ正本若クハ謄本ヲ付スルノ必要ナカルヘキ乎然レモ現行監獄則第六條ニ新タニ入監スル者ハ典獄先ツ令狀又ハ宣告書ヲ査閲シテ云々トアルニ依リ司獄官更

ニ於テ檢事ノ指揮書ノミニテハ差支ユル旨ノ異議ヲ申立ルコトナキヲ保セサルヘシト雖モ之レニ關セス單ニ指揮書ノミニテ以テ執行セシメ得ヘキヤ

(說明) 明治十五年司法省丙第八號布達ハ本法等ト抵觸ノ廉ナキニ付該達ハ現今生存スルモノナルヘキニ依リ檢事ハ刑ノ執行指揮書ニハ必ス判決ノ正本又ハ謄本ヲ添ヘテ司獄官ヘ送達セサルヘカラス監獄則第六條ニ典獄ハ先ツ令狀又ハ宣告書ヲ査閲シ云々トアル明文ニ依ルモ單ニ指揮書ノミニテハ不都合ノモノトス

(疑義) 從來始審裁判所ニ於テハ刑事被告人ノ所持品及證據物品ヲ始メ其他犯罪ニ關係セル物品ハ檢事局ニ於テ兼テ帳簿ヲ備置キ一々記載ノ上會計部ニ預置キ裁判言渡ノ后檢事局ニ於テ刑ノ執行ト共ニ夫々處分シ來レリ然ルニ刑事訴訟法第三百

刑事被告人ノ所持品及證據物品ノ處分方ニ就テノ疑問

廿條第二項ニ檢事ニ於テ處分スヘキモノ、種類ヲ限ラレタル以上ハ被告ノ所有ニ係ル物品等ハ勿論、右第二項ニ記載スルモノト雖モ起訴ノ際、地方裁判所書記課ニ於テ保管シ置キ刑ノ言渡ヲ待テ檢事ノ處分ニ係ルモノト否ラサルモノトヲ區別スヘキヤ將タ第二項ハ單ニ檢事ノ處分スヘキ種類ヲ制限セラレタル點ニシテ裁判前物品保管ノ儀ハ便宜ニヨリ檢事ニ於テスルモ又地方廳ニ於テ之ヲ爲スモ敢テ差支ナキ者ナリヤ

(說明) 刑事訴訟法第三百二十條第二項ハ治罪法第四百六十二條第二項ト同文意ニシテ物品保管ノ手續ヲ別ニ改正シタルモノニ非ラス且檢事ハ刑ノ執行官ナレハ從前ノ通檢事局ニ於テ保管シ置キ裁判言渡ノ後刑ノ執行ト共ニ處分スル方相當ナリトス

(疑義) 本條第三項破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ニ限り檢事之

ヲ處分ス可シト規定シタルハ如何ナル理由ニ因ル乎

(說明) 沒收物品中破壊シ若クハ廢棄スヘキモノハ檢事自ラ之ヲ處分シ以テ輕忽ニ付スルノ弊ナカラシメンカ爲メナリ

(參照) 舊治罪法

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第三百廿一條 死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

〔參照〕 舊治罪法

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ欠席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル片ハ其執行ヲナシタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ

一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地

二 罪名刑名

三 再犯

四 裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五 對審裁判又ハ欠席裁判

第四百六十五條 已決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置スヘシ

違警罪ノ已決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

〔該第四百六十四條第四百六十五條ヲ本法ニ於テ削除シタルハ該條ノ如キハ特ニ法律ニ規定スルニ及ハサルコトニシテ實際其必要ノ生シタル片ハ別ニ規則ヲ設クヘキヲ至當トスレハナリ〕

第三百二十二條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定ス

本條ヲ設定セ
ル所以ハ如何

可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

(疑義) 本條ハ何等ノ爲メニ之ヲ設ケタル乎

(説明) 夫レ裁判ハ常ニ明晰ナリト雖モ時ニ曖昧ニ屬スルモノ
ナキニアラス乃チ其裁判言渡ノ條件ニ付キ檢事ヨリ疑義ノ申
立ヲ爲シ又ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ其執行ニ付キ異議ノ
申立ニ爲スコトアリ是等ノ場合ニ於テハ刑ノ言渡ヲ爲シタル
裁判所ニ於テ之ヲ決定ス是レ其言渡シタル刑ノ正實ニ執行セ
ラレノコトヲ確保スル爲メナリ又之レニ對シ抗告ヲ爲スコト
ヲ許シタルモノハ倍々其正確ナランヲ欲シテナリ

其言渡ニ付キ
疑義ノ申立ト
ハ如何又其執
行ニ就キ異議
ノ申立トハ何
ソナ

(疑義) 本條其言渡ニ付キ疑義ノ申立トハ如何又其執行ニ付キ
異議ノ申立トハ如何ナルモノナリヤ

(説明) 本條疑義ノ申立トハ言渡ノ不明ナル點ニ對シテ爲ス所
ノモノニシテ異議ノ申立トハ直接ニ言渡ニ對スルニアラスシ

刑ノ言渡ヲ受
ケタル者逃亡
ノ後捕ニ就キ
タルトキ人違
立ヲ爲セル時
ハ之ヲ如何ス
ルヤ

テ其裁判ノ執行ニ對シテ不服ヲ唱フルモノヲ云フナリ

(疑義) 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタルトキ人違
ノ申立ヲ爲シタルトキハ如何スヘキヤ

(説明) 人違ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テハ言渡ノ眞偽
ヲ發出スルニアラスシテ言渡ヲ受ケタル者ハ果シテ捕ニ就キ
タル者ナリヤ否ヲ勘査セサルヘカラス故ニ此申立ハ刑ノ言渡
ヲ爲シタル裁判所ノ判定ニ付セスシテ其罪ヲ認メタル裁判所
ノ判定ニ付セサルヘカラス若シ其罪ヲ認メタル裁判所ニ於テ
本犯ナリヤ否ヲ判定スル能ハサルトキハ事實參考ノ爲メ會テ
其事件ニ干預シタル裁判官檢事書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出ス
ヲ得サルヘカラス但舊法ニ於テハ此場合ノ明文アリ本法ニハ
其明文ナキモ均シク舊法ノ如クニ決セサルヘカラス

(參照) 舊治罪法

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致スヘシ

裁判所ニ於テ本犯ナルヲ認定スルヲ能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ証人ヲ呼出スヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタルモノ、申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聞キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

(本法ニ於テ該第四百六十七條第四百六十八條ヲ削除シタ

第三百廿三條

刑事ノ訴訟費用トハ何カ

ルハ是等ノ條ノ如キハ今日以後ハ不用ニシテ且杞憂ニ過クルノ法條ナルヲ以テナリ)

第三百二十三條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ辨濟ス可キ訴訟費用ニ付キ其判決ノ執行ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

(疑義) 刑事ノ訴訟費用トハ如何ナルモノヲ云フヤ

(説明) 刑事上ノ訴訟費用トハ證人醫師鑑定人通辯人翻譯人ニ給與スヘキ日當旅費止宿料日稼人ニ給與スヘキ償金解剖舎密翻譯等ノ費用ヲ謂フ

(參照) 舊治罪法

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第三百二十四條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期間經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法大臣ニ之ヲ爲ス可シ
復權ノ願書ハ現ニ住スル地ノ地方裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

復權ノ願トハ如何

(疑義) 復權ノ願トハ如何

(說明) 復權ノ願トハ刑ノ執行ニ關スル者ニシテ即チ其剝奪セラレタル權利ヲ回復センコトヲ願フモノヲ云フ

復權トハ如何又復權ノ股ナクハ如何

(疑義) 復權トハ如何又復權ノ設ケアル所以ハ如何

(說明) 復權トハ重罪ノ刑ニ處セラレタルモノ其主刑ノ有期ナルト無期ナルトチ問ハス其終身間公權ヲ剝奪セラレタルモ主刑滿了後五年ヲ經過スルノ後其情狀ニ因リ將來ニ公權ノ實行ヲ許スヲ云フ而シテ此制ヲ設ケタルハ犯人既ニ先非ヲ悔悟シ

復權

四二二

第三百二十五條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ
第一 判決ノ正本
第二 主刑ノ滿期特赦ト爲リ又ハ時効ノ成就シタ

悔改ノ狀著シキニ仍ホ其刑ヲ繼續セシムルハ刑ノ必要既ニ去テ後仍ホ之ヲ處刑スルモノニシテ正シキヲ得タルモノト謂フヘカラサルヲ以テナリ

(參照) 舊治罪法

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ
復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

復權

四二三

ルコトヲ證明スル書類

第三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタル證書

第四 賠償及ヒ訴訟費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免

カレタル證書

第五 過去、現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

(疑義) 復権ノ願ニ判決ノ正本ヲ添付スル必要ハ如何

(説明) 判決ノ正本ヲ添付スルモノハ是レ此言渡ニ因リテ剝奪セラレタル公權ヲ回復セントスルノ願ナレハ其失權ノ基因タル判決言渡書ヲ添フルハ自然ニ必要ナレハナリ

(疑義) 復権ノ願ニ主刑ノ満期特赦ト爲リ又ハ時効ノ成就シタルコトヲ證明スル書類ヲ添フルノ必要ハ如何

(説明) 此等ノ書類ハ主刑ノ終リタルコトヲ證明スルモノナレハ又同時ニ主刑満期後五年ノ期間經過シタルコトヲ證明スル

復権ノ願ニ判決ノ正本ヲ添付スル必要ハ如何

復権ノ願ニ本條第二號ノ規定ニ照シテ證明スルモノハ如何

ニ必要ナレハナリ

(疑義) 復権ノ願ニ假出獄及ヒ監視ヲ免セラレタル證書ヲ添フルノ必要ハ如何

(説明) 此等ノ證書ヲ添フルモノハ是等ノ處置ハ何レモ受刑者ノ行狀悔改ノ實ヲ徵スルニ定ルモノナルカ故ニ其證書ヲ添ヘシメ以テ亦其品行取調上ノ參考ニ供スルノ需要アルカ爲メナリ

(疑義) 復権ノ願ニ賠償及ヒ訴訟費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタル證書ヲ添フルノ必要ハ如何

(説明) 此等ノ證書ハ請願人カ能ク民事上ノ義務ヲ履行シ又ハ債權者ヨリ義務ノ釋放ヲ得タルコトヲ證明スルモノナルカ故ニ公權ヲ回復セシムルモ公益ニ害ナキコトヲ證明スル一斑ト爲スニ足ル可キヲ以テナリ

復権ノ願ニ假出獄及ヒ監視ヲ免セラレタル證書ヲ添フルノ必要ハ如何

復権ノ願ニ本條第四號ノ規定ニ照シテ證明スルモノハ如何

復権ノ願ニ過
去現在ノ住所
及生計ヲ記載
セサルベカラ
ザル所以ハ如
何

(疑義) 復権ノ願ニ過去現在ノ住所及生計ヲ記載スル書類ヲ添
フルノ必要ハ如何

(説明) 本項ノ書類ヲ添フルモノハ請願人ノ品行生計等ノ如何
ヲ取調ヘ復権ヲ許スノ當否ヲ勘査スルニ必要ナル可ケレハナ
リ

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十一條 復権ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

- 一 裁判言渡書ノ謄本
- 二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルコトヲ證明
スル書類
- 三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書
- 四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタ
ルノ證書

第三百二十六條

五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類
第三百二十六條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ
爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ檢事長ニ差出ス
可シ

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ
前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出
ス可シ

第三百二十七條

第三百二十七條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権
ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法大臣ニ差
出ス可シ

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復権ノ願

第三百二十八條

ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ
第三百二十八條 司法大臣ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ
檢閲シ之ニ意見書ヲ添ヘ速ニ上奏ス可シ

復権ヲ司法大臣ニ於テ速ニ上奏セサル可カラサルノ理由ハ如何

(疑義) 復権ハ司法大臣ニ於テ速ニ上奏セサル可カラサルノ理由ハ如何

(説明) 元來復権ハ確定判決ニ因リ剝奪シタル公權ヲ回復スルモノナレハ事素ト至重ニ屬スルカ故ニ敢テ司法大臣ノ許否ス可キ限リニアラス勅裁ニ因テ事ヲ決セサルヘカラス之レ速ニ上奏スヘシト規定シタル所以ナリ

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十四條 司法卿ハ復権ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ

其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第三百二十九條

第三百二十九條 勅裁ニ因リ復権ノ願ヲ却下シタルト

キハ司法大臣ヨリ其旨ヲ檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル地方裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期間ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從フ

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復権ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十條

更ニ復権ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第三百三十條 復権ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨ

リ其裁可狀ヲ檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出

シタル地方裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致

シ其裁判所ニ於テハ之ヲ判決ノ原本ニ記入ス可シ

〔參照〕 舊治置法

第四百七十六條 復権ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁

可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨリ願書ヲ差出

シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ

檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ

又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送致シ其

裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可シ

特赦

第三章 特赦

第三百三十一條

第三百三十一條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニ

テモ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事又ハ監獄署長

ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法大臣ニ申立ルコトヲ得

監獄署長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ストキハ檢事ヲ經由ス

可シ但檢事ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタルトキハ司法大臣ヨリ其書類ニ意

見書ヲ添へ上奏ス可シ

〔疑義〕 特赦トハ如何又特赦ハ勅裁ヲ要スル理由ハ如何

〔説明〕 特赦トハ刑ノ言渡確定シタル後司法大臣ノ申立ニ因リ

勅裁ニ於テ確定判決ノ刑ヲ減輕スルモノヲ云フ確定判決ニ因

特赦トハ如何
之レニ勅裁ヲ
要スル所以ハ
如何

リ定マリタル刑ハ尋常一般ノ處分ヲ以テ之ヲ變更減縮スルコトヲ得ス是レ勅裁ニアラサレハ爲シ能ハサル所以ナリ

第三章 特赦

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シケル後何時ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法卿ニ申立ルヲ得

監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見書ヲ添へ上奏ス可シ

第三百三十二條 司法大臣ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第三百三十二條

死刑ヲ除ク外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セズ

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヲ得
死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ停止セス

第三百三十三條 特赦ノ申立却下アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三百三十三條

〔參照〕 舊治罪法

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨ヲ通知ス可シ

第三百三十四條

第三百三十四條 特赦ノ裁可アリタルトキハ司法大臣ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第三百三十條ノ規定ニ從フ

〔參照〕舊治罪法

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ從フ

附則

附則

附則第一條

第一條 此法律施行前ニ受理シタル豫審ノ故障及ヒ其故障ノ判決ニ對スル上告ハ之ヲ受理シタル地方裁判所又ハ大審院ニ於テ抗告トシテ之ヲ裁判ス可シ

附則第二條

第二條 大審院ニ於テ既ニ受理シタル哀訴、裁判管轄ヲ定ムルノ訴及ヒ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ治

附則第三條

罪法ノ手續ニ依リ大審院之ヲ裁判ス可シ

附則第四條

第三條 既ニ發シタル拘留狀、收監狀ハ此法律ニ定メタル拘留狀ノ効ヲ有ス

附則第五條

第四條 此法律ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第五條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行シ其日ヨリ治罪法ヲ廢ス

疑義説明
適例參照
刑事訴訟法註釋下卷畢

附錄 關係要則

重罪控訴豫納金規則

○重罪控訴豫納金規則明治廿三年二月八日法律第廿七號

第一條 重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金貳拾圓ヲ豫納スヘシ

第二條 重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者貧困ニシテ保證金ヲ豫納スル能ハサルトキハ控訴ノ申立ト同時ニ保證金ノ免除ヲ請求スルコトヲ得

第三條 保證金ノ免除ヲ請求シタル者ハ其請求ヲ爲シタル日ヨリ十四日內ニ控訴ノ趣意書ト共ニ裁判費用支辨ノ資力ナキコトヲ證スヘキ住居地市町村長ノ證明書ヲ差出スヘシ但其市町村役場三里以外ニ在ルトキハ治罪法第十九條ニ規定

シタル猶豫ヲ與フ

第四條 前二條ニ記載シタル書類ハ訴訟ニ關スル一切ノ書類ト共ニ第一審裁判所ノ檢事ヨリ控訴院ノ書記課ニ之ヲ送致スヘシ

第五條 控訴院ハ檢事ノ意見ヲ聽キ保證金免除請求ノ當否ヲ決定スヘシ但控訴ノ事由ナシト認ムルカ又ハ事由アルモ實益ナシト認ムルトキハ免除ヲ與ヘサルモノトス

第六條 保證金ノ免除ナキトキハ控訴ノ申立ハ其効ナキモノトス

第七條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ第一條ノ保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

輕罪ニ係ル控訴納金規則

○輕罪ニ係ル控訴納金規則 明治十八年一月六日布告第二號

明治十四年^{十一月}第七拾四號布告ヲ廢シ自今輕罪ニ係ル控訴ハ左ノ規則ニ從ヒ之ヲ爲スコトヲ得但治罪法中此規則ニ抵觸スル條件ハ當分ノ内施行セス

第一條 二十三年六月二十八日法律第四十七號ヲ以テ削除

第二條 同上

第三條 被告人公訴ニ關シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ 二十三年六月二十八日法律第四十七號ヲ以テ改メト

第四條 被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條 二十三年六月二十八日法律第四十七號ヲ以テ削除

罰金追徴ニ係
ル豫納金ノ件

○罰金及ヒ追徴ニ係ル豫納金ノ件 明治十九年六月九日勅令第四十六號
罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其
罰金及追徴金ノ十分ノ一ニ當ル金額ヲ上告越意書ニ添へ原裁
判所書記局ニ預置ク可シ否ラサレハ上告ヲ爲スコトヲ得ス若
シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ没入ス
ルノ言渡ヲ爲スヘシ

司法省刑第五
百四十五號訓
令

司法省刑第五百四十五號訓令 明治十九年六月十五日

裁判所

本年勅令第四十六號ニ依リ上告申立人ヨリ豫納シタル金額ハ
書記ヨリ會計課ニ送致シ且其旨ヲ書面ニ記シ檢事ノ檢印ヲ受
ケ上告書類ニ添へ之ヲ大審院ニ差出ヌ可シ

大政官達第八
十六號

大政官達第八十六號 明治十四年十月四日

警視廳

府縣 東京府 沖繩
縣 除ク

治罪法實施ニ付テハ大審院其他各裁判所公廷取締ノ使用ニ供
スルタメ其院長又ハ所長ノ照會ニ應シ一名又ハ數名ノ巡查爲
相詰又拘留被告人審問中ハ其護送ノ巡查或ハ押丁ヲシテ守卒
トシテ公廷ニ入り看護セシムヘシ此旨相達候事

明治十四年第
八十二號官省
院使廳府縣へ
達

○明治十四年(九月二十日)第八十二號官省院使廳府縣へ達
司法官吏ヨリ巡查及ヒ兵員ヲ要求使用スルニハ左ノ手續ニ從
フヘシ此旨相達候事

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ
物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又ハ憲
兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得
但事機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺

又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルヲ得

司法省明治十五年丙第十一號達

○司法省明治十五年三月十五日丙第十一號

大審院 裁判所

警視廳 府縣東京府

今般太政官ヨリ別紙ノ通御達相成候條此旨相達候事

(別紙)

司法省

勅任官禁錮ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シ及ヒ奏任官華族帶勳有位ノ者禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ罪ヲ犯シタル時ハ當該檢察官ヨリ司法卿ニ具狀シ司法卿其事由ヲ奏聞シテ處分スヘシ但現行犯罪ニ係ル者ハ處分シテ後ニ奏聞スルコトヲ得此旨相達候事

明治十五年三月二十二日

太政大臣三條實美

違警罪即決令

○違警罪即決例 明治十八年九月二十日第三十一號布告

明治十四年九月第四十四號布告及ヒ同年十二月第八十號布告ヲ廢止シ違警罪即決例制定

違警罪即決例

第一條 警察署長及分署長又ハ其代理タル官吏ハ其ノ管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラズ

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證據ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲ス可シ又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡書ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ申立書ヲ差出ス可シ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致ス

可シ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セザル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メザル者ハ一圓チ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、ル者ハ第五條ニ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直

チニ出廷シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出廷セサル時ハ保證金ヲ没入シテ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

○司法警察訓則 刑第二百七十三號明治十九年三月二十七日司法省訓示

著者曰ク司法警察訓則ヲ參照ニ掲記シタルモノハ該則ハ刑事訴訟法ノ補則トモ言フヘキモノニシテ最モ本法ニ執リテハ緊切必要ノモノナルヲ以テナリ而シテ該則ハ舊治罪法ノ下ニ發命セラレタルモノナルカ故ニ舊治罪法ノ改正セラル、ニ於テハ多少其影響ヲ被ムレリト

第一編 總則

第一章 司法警察ノ要領

雖モ本法ニ抵觸セサル條項ハ固ヨリ其効ノ存スルモノニシテ又今日ニ必要ナル條項多キヲ以テナリ而シテ本法ト該則ト抵觸スルノ條項ハ總テ本法ノ如クニ改正セラレタルモノト知ラサルヘカヲサルナリ

第一條 司法警察ハ犯罪ノ証憑及ヒ犯人ヲ搜查シ公訴ノ提起及ヒ實行ノ資料ニ供スルヲ目的トス

第二條 司法警察ハ晝夜ノ差別ナク之ヲ行フ可キモノトス

第三條 司法警察ノ處分ハ迅速ナラサル可カラス事機ニ應シテ證據ヲ集取スルコトヲ要ス

第四條 司法警察ノ處分ハ秘密ナラサル可カラス細大ノ事物ニ注目シテ證據ヲ完備スルコトヲ要ス

第五條 司法警察ノ處分ハ秘密ナラサル可カラス嚴ニ其漏泄ヲ防キ犯人逃走罪證湮滅ノ弊ナカラシメ且成ル可ク被告人其他ノ者ノ名譽ヲ毀損スルコトナキヲ要ス

第六條 司法警察ノ處分ハ大事ニ嚴ニシテ小事ニ寛ナラサル可カラス小事ハ成ル可ク告訴人ノ證明ニ任ス可シ又濫リニ一家ノ隱微ヲ訐クコトナキヲ要ス

第七條 司法警察ノ權ハ身体拘束家宅進入物件差押ニ及ホスコトヲ得ス

第二章 司法警察官ノ構成

第八條 司法警察權ハ司法大臣ノ統轄ニ屬ス

第九條 控訴裁判所檢察長ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ者ヲ監督ス

又其管轄地内ニ於テ自ラ司法警察ノ職務ヲ行ヒ又ハ其所屬

司法警察官ノ構成

ノ檢察ヲシテ之ヲ行ハシムルコトヲ得

又司法警察ノ職務ニ付キ其管轄地内ノ檢察ニ告達シ又ハ時宜ニ因リ直チニ司法警察官ニ指揮スルコトアル可シ

第十條 輕罪裁判所檢察ハ其裁判所ノ管轄地内ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行ヒ又其輔佐トシテ司法警察ノ職務ヲ行フ者ヲ指揮ス

第十一條 左ニ記載シタル官吏ハ檢察ノ輔佐トシテ其指揮ヲ受ケ各其管轄地内ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ

一 警視警部長警部

二 憲兵將校下士

三 區長郡長

四 治安判事

五 第一項第二項ノ官吏在ラサル地ノ戶長

第一項第二項ノ官吏ハ專務ニシテ第三項以下ノ官吏ハ專務ニ非サル者トス

專務ニ非サル官吏ハ成ル可ク其職務ヲ專務ノ官吏ニ讓ル可シ

〔參照〕 明治十四年太政官第十一號達憲兵條例

第四條 憲兵ハ其ノ職務ニ關シ警視總監府知事東京府知事ヲ除ク并ニ各裁判所檢事ヨリ指示ヲ受クル時ハ直チニ其事ニ從

フ可シ

〔參照〕 明治十五年第二十三號布告

憲兵ヲ設置シタル地方ニ於テハ其將校下士ハ司法警察官トシ卒ハ巡查ト同シク司法警察ノ事ヲ行ハシム

第十二條 警視總監府知事東京府知事ヲ除ク縣令ハ各其管轄地内ニ於

テ司法警察ノ職務ヲ行フニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有ス但國

事犯其他重大ナル事件アル場合ニ限リ其職務ヲ行フヲ例トス

第十三條 豫審判事ハ直チニ告訴發ヲ受ケタル事件ニ付キ其裁判所管轄地内ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ但急速ヲ要セサル事件ハ成ル可ク檢事ニ讓ル可シ

第十四條 空地權戶釧路集治監典獄ハ各監獄所在地ニ於テ其管理スル囚人及ヒ假出獄免幽閉ノ者ノ犯罪ニ付キ司法警察ノ職務ヲ行フ

〔參照〕 明治十五年第十六號布告

權戶集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

〔參照〕 明治十五年第四十一號布告

空地集治監ノ囚人假出獄免幽閉ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ

司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

〔參照〕 明治十八年第四十二號布告

釧路集治監ノ囚人假出獄免幽罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司法官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

第十五條 小笠原島出張東京府官吏ハ其島内ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ

〔參照〕 明治十四年第五十六號布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所即チ違所判始審裁判所即チ輕罪ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民事控訴及ヒ重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

第十六條 伊豆七島地役人ハ其管轄地内ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ

〔參照〕 明治十四年第五十七號布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏へ民事ハ百圓以下及勸解并ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

第十七條 清國朝鮮國駐在檢事ハ各其駐在地ニ於テ日本國人ノ犯罪ニ付キ司法警察ノ職務ヲ行フ

第十八條 商船ノ船長ハ商船内ノ犯罪ニ付キ明治十四年第六十五號布告ニ從ヒ司法警察ノ職務ヲ行フ

〔參照〕 明治十四年第六十五號布告商船内犯罪取扱規則

第一條 何人タリトモ商船内ニ於テ重罪輕罪アルコトヲ認知シ又ハ重罪輕罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ船長ニ告訴告發ヲ爲スコトヲ得

第二條 船長告訴告發ヲ受ケタル時又ハ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ其事件ニ付キ假ニ訊問檢證ノ處分ヲ爲シ且證憑及ヒ事實參考トナルヘキ事物ヲ集取シ圖書ヲ作ルヘシ但調書ヲ作ルコト能ハサル時ハ第三條ニ記載シタル官吏ニ其申立ヲ爲スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ立會人二名以上アルヲ要ス

第三條 船長ハ證憑及ヒ事實參考ト爲ルヘキ事物ヲ取纏メ被告人ト共ニ該船碇泊又ハ着港ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ引渡スヘシ若シ外國ノ港埠ニ着シタル時ハ其地駐劄ノ領事ニ引渡ス可シ

第十九條 司法警察官ノ管轄ハ犯罪ノ性質場所及ヒ被告人ノ身分ニ付キ制限アルコトナシ

第二十條 司法警察官他ノ管轄地内ニ於テ捜査ヲ爲ス可キ者ハ之ヲ其地ノ司法警察官ニ囑託ス可シ

司法警察官ノ職務

第三章 司法警察官ノ職務

第二十一條 司法警察官ノ職務左ノ如シ

一 犯罪ノ捜査

二 現行犯ノ假豫審

第二十二條 司法警察官ハ服務時間外ト雖モ急速ヲ要スル事件アル時ハ成ル可ク其處分ヲ爲サル可カラス

第二十三條 司法警察官職務ヲ行フ場合ニ於テ其制服ヲ着用セサル時ハ司法警察官タルノ證票ヲ携帯ス可シ若シ其處分ヲ受クル者ノ請求アル時ハ之ヲ示ス可シ

第二十四條 司法警察官ハ專ラ奸惡ヲ摘發シ公害ヲ除ケコトニ着眼ス可シ一概ニ犯罪ヲ檢舉スルコトノ多數ナルノミチ以テ其職務ヲ盡スモノト爲ス可カラス

第二十五條 奸惡ノ徒ハ巧ミニ法網ヲ脱スルコトヲ圖ルモノニシテ無知ノ細民知ラスシテ法律ニ觸ル、ノ比ニ非ス司法警察官タル者宜シク其犯情ヲ看破スルコトニ注意ス可シ

第二十六條 司法警察官ハ搜查ヲ爲スニ付キ檢事ノ指揮ニ從フ可キハ勿論ナリト雖モ事毎ニ其指揮ヲ待ツ可キモノニ非ス故ニ犯罪アルニ當テハ直ニ搜查ニ着手セサル可カラス

第二十七條 檢事ト司法警察官トハ職權ニ差等アリト雖モ其關係密着シテ事務ヲ料理ス可キモノナルニ因リ互ニ協和ヲ旨トス可シ

第二十八條 司法警察官ハ管轄内外ニ拘ハラス執務ノ便益ヲ

圖ル爲メ平常互ニ氣脈ヲ通ス可シ

第二十九條 司法警察官被告人又ハ被害者ト親屬若クハ故舊ナル時ハ嫌疑ヲ避クル爲メ成ル可ク其處分ヲ他ノ官吏ニ讓ル可シ

第三十條 司法警察官職務ヲ行フニ際シ必要トスル時ハ警察署憲兵屯營ニ照會シテ巡查憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得但事務緊急ナル時ハ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得

若シ事緊急重要ニ涉ル時ハ鎮臺又ハ營所分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得其要求書ニハ成ル可ク犯罪ノ性質被告人員數所在地及ヒ其携帯スル兇器ノ種類等ヲ記載ス可シ

〔參照〕 明治十四年太政官第八十二號達

第一條 裁判官檢察官及ヒ司法警察官治罪法ニ從ヒ檢證及ヒ物件差押其他職務ヲ行フニ當リ必要ナル時ハ警察署又

ハ憲兵屯營ニ照會シテ巡查又ハ憲兵卒ヲ使用スルコトヲ得

但シ事機緊急ナル時ハ直チニ之ヲ使用スルコトヲ得

第二條 前條ノ場合ニ於テ事緊急重要ニ涉ル時ハ直チニ鎮臺又ハ分營ニ照會シテ兵力ヲ要求スルコトヲ得

第三十一條 兵力ヲ要求シタル司法警察官ハ直接ニ兵卒ヲ指揮スルコトヲ得スト雖モ處分ノ方法ニ付キ指揮官ニ協議スルコトヲ得

第三十二條 謀故殺放火強盜其他重罪輕罪ヲ分タス重要ナル事件アリタル時ハ司法警察官ハ速ニ其旨ヲ檢事ニ報告ス可シ

第三十三條 刑法第二編第一章第二章及ヒ第三章第一節ノ犯罪アリタル時ハ司法警察官ハ速ニ檢事ニ報告シ檢事ハ之ヲ

司法大臣ニ具狀ス可シ

第三十四條 勅委任官華族帶勳有位者禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ罪ヲ犯シタル時ハ司法警察官ハ速ニ其旨ヲ檢事ニ報告ス可シ

第三十五條 外國人重罪輕罪ヲ犯シ又ハ外國人ニ對シ重罪輕罪ヲ犯シタル者アル時ハ檢事司法警察官ハ第三十三條ノ手續ヲ爲ス可シ

第三十六條 外國公使館ニ關スル事件ニ付テハ明治七年太政官第二百二十八號達ニ從ヒ處分ス可シ

〔參照〕 明治七年太政官第二百二十八號達司法警察規則附錄

外國公使及公使館屬員ノ事

第一條 外國公使ハ我國憲ヲ以テ褻瀆スヘカラサル通義ナレハ是レヲ擴充スル時ハ其家族並ニ公使館屬員書記官隨員公使ノ

僱傭書記官ノ家族及ヒ書記官ノ僱傭及ヒ其家屋車馬迄モ
 等總テ公使館ノ名稱ニアル者ヲ云フ
 同様ナリト思量スヘシ

第二條 内國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ備ハレ公使館ノ
 名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬隸ト見做シ若シ事故アリテ逮
 捕セラルヲ得サルカ或ハ呼出シテ糾問セサルヲ得サルト
 キハ外務省ヲ經テ公使館ヘ報知シ其唯諾ヲ待テ後引出
 スヘシ尤モ其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラ
 ス

第三條 内國人各公使館及ヒ書記官ニ備ハレ中ハ其公使又
 ハ代理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省ヘ届出外務省ハ其届書ヲ
 速ニ司法警察官吏ヘ送達シ置ヘシ警察官吏ハ常ニ其姓名
 ヲ簿記シ置クヘシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在
 ル處ヲ聞糺ス時公使館ニ雇ハレ中ト稱スル時其簿記ト校

照シ愈相違ナキハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ遂ケタル後
 チ其處分ヲ施スヘシ若シ其姓名簿記中ニ在ラサル者ニテ
 モ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館ヘ同道シ右
 ノ如ク處置スヘシ
 但シ重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ
 處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條 外國公使館内ヘハ事故アリテ館主ヨリ請求スルト
 キノ外決シテ立入ルヘカラス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト
 見留タル者奔逃ノ門内ヘ匿入セシ等毫髮ノ間モ猶豫スヘ
 カラサル時ハ其把門者ニ告ケ其館主ノ許可ヲ受ケ後館内
 又ハ邸内ヲ探索スヘシ

第五條 右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論車

馬家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ヌ手ヲ降ヌヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合セ而シテ其處分ヲナスヘシ

外國公使屬員罪ヲ犯シ并犯罪ノ内國人公使館ニ住居スル時ノ事

第六條 外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火強姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行テ見及フカ或ハ現ニ見スト雖トモ衆人ヨリ報告シ確證アリテ片時モ猶豫ナシカタキトキハ其人ヲ其場ニ引留置即刻公使館ヘ報知ノ上同館ヘ引渡シ又外務省ヘ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ申ヘシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可カラス或ハ屬員ノ内國人ハ引留置即刻公使館ヘ報知シ改メテ彼ヨリ引渡ヲ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申ヘ

捜査權
捜査權ノ起因

第七條 犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其ノ罪科ノ知レタル内國人現ニ公使館内ニ備ハレテ公使館ニ住居スルルハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省ヘ報知シ同館ヘ照會ヲ乞テ館主ニ引渡シト要求シ其人ヲ受取リテ後之レヲ捕縛ス可シ若シ館主之ヲ拒ムルハ其旨ヲ猶外務省ヘ報知シテ其處分ヲ定ムヘシ

第三十七條 外國人ノ身体家宅物件ニ關スル處分ニ付テハ本則ニ適用ス可カラス但朝鮮國人及ヒ條約未濟國人ニ付テハ此限ニ在ラス

第二編 捜査權

第一章 捜査權ノ起因

第三十八條 捜査權ハ犯罪ニ先チ又ハ犯罪ニ後レテ生スルモ

犯罪ノ成立

ノニ非ス犯罪ト同時ニ生スルモノナルニ因リ其起因ヲ知ル
 ニハ犯罪ノ成立不成立ヲ鑑別スルヲ必要トス
 第三十九條 犯罪ノ成立不成立ハ容易ニ鑑別スヘキモノト否
 ラサルモノトアリ故ニ犯罪アリト思料ス可キ事件ニ付テハ
 勉メテ其取調ヲ爲ス可シ犯罪ノ成立ヲ確認ス可カラサルノ
 故ヲ以テ初メヨリ之ヲ忽カニスルコトヲ得ス

第一節 犯罪成立

第四十條 犯罪成立ニ關スル一般ノ條件左ノ如シ
 一自由 他ノ強制ヲ受ケス事ノ行否自己ノ意ニ隨フテ謂フ
 二辨別 普通ノ知覺精神ヲ有シ事ノ是非ヲ識別スルヲ謂フ
 三故意 法律規則ノ禁令アルコトヲ知ルト知ラサルト別
 タス罪ト爲ル可キ事實ヲ知リテ之ヲ行ヒ若クハ行ハサル
 ノ意アルヲ謂フ

未遂犯罪

第四十一條 前條ニ記載シタル條件ハ犯罪成立ニ必要ナリト
 雖モ諸罰則違警罪及ヒ過失罪ニ付テハ法律ノ特例又ハ犯罪
 ノ性質ニ因リ條件ノ具備ヲ要セサルモノアリ
 第四十二條 犯罪成立ニ關スル一般ノ條件ノ外各罪固有ノ原
 素ヲ具備スルヲ要ス例ヘハ詐論取財ノ罪ニ付テハ欺罔取受
 及ヒ他人ノ財物ノ三原素ヲ要スル如キ是ナリ
 第四十三條 犯罪ノ原素具備シタル時ヲ以テ犯罪成立ノ期ト
 爲スト雖モ其原素ハ必スシモ同時ニ具備スルヲ要セス

第二節 未遂犯罪

第四十四條 法律ニ於テハ總テ已遂犯罪ニ付キ刑名ヲ定メタ
 ルモノニシテ其犯罪ノ原素タル可キ事實ニ着手スルモ意外
 ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ行ヒ遂ケサル時ハ未遂犯罪トス
 第四十五條 未遂犯罪ハ法律上罰スルト罰セサルトノ區別ア

- 一 重罪ノ未遂犯ハ總テ之ヲ罰ス
- 二 輕罪ノ未遂犯ハ法律ニ明文アルニ非サレハ之ヲ罰スルコトナシ其明文アルモノ概テ左ノ如シ
 - 一 内亂ニ關スル罪
 - 一 囚徒逃走ノ罪
 - 一 私ニ軍用ノ銃砲彈藥ヲ製造スル罪
 - 一 往來通信ヲ妨害スル罪
 - 一 官印ヲ偽造スル罪
 - 一 私印私書ヲ偽造スル罪
 - 一 死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪
 - 一 竊盜ノ罪
 - 一 詐欺取財ノ罪及ヒ受寄財物ニ關スル罪

- 一 火藥取締規則第二十五條ノ罪
 - 一 郵便條例第二百三十三條第二百三十七條ノ罪
 - 一 電信條例第五十八條第六十二條第六十四條第六十五條ノ罪
 - 一 海底電信線保護萬國聯合條約罰則第一條ノ罪
 - 三 違警罪ノ未遂犯ハ總テ之ヲ罰セス
- 第四十六條 犯罪ニ着手スト雖モ事理ニ於テ其目的ヲ遂ケ得ヘカヲサルモノハ不能犯ニシテ未遂犯ト爲ス可カラス不能犯ハ法律上之ヲ罰セスト雖モ其所爲ニ因リ別罪ヲ構成スルコトアリ例ヘハ人ヲ毒殺セントシタルニ其藥質人ヲ殺スニ足ラサルモ爲メニ其人ノ健康ヲ害スルニ至リタルノ類是レナリ
- 第四十七條 犯罪ニ着手スト雖モ自ラ其事ヲ中止シタル時ハ

之ヲ遂ケサルノ原因障礙舛錯ニ非サルヲ以テ亦未遂犯ト爲
ス可カラス犯罪ヲ中止シタル場合ハ法律上之ヲ罰セスト雖
モ中止前ノ所爲ノミニ因リ別罪ヲ構成スルコトアリ例ヘハ
竊盜ヲ爲サントシテ人ノ邸宅ニ入り自ラ其事ヲ中止シタル
時ハ人ノ住所ヲ侵スノ罪アルノ類是レナリ

第四十八條 犯罪着手前ノ所爲ハ法律上之ヲ罰セス但内亂外
患ニ關スル罪貨幣ヲ偽造スル罪等ニ付キ陰謀豫備ヲ罰スル
ハ例外トス

數人共犯

第三節 數人共犯

第四十九條 數人共犯ニ三様アリ二人以上合同シテ現ニ罪ヲ
犯ス者人ヲ教唆シテ罪ヲ犯サシムル者及ヒ人ノ罪ヲ犯スコ
トヲ知り豫備ノ所爲ヲ以テ幫助スル者はレナリ現ニ罪ヲ犯
ス者及ヒ犯罪ヲ教唆スル者ハ正犯トシ犯罪ヲ幫助スル者ハ

從犯トス

第五十條 教唆者及ヒ從犯ヲ罰スルハ重罪輕罪ニ止リ違警罪
ニ於テハ之ヲ罰セス

第五十一條 二人以上合同シテ現ニ罪ヲ犯ス時ハ情ノ輕重所
行ノ異同ニ拘ラス各自同一ノ罪アルモノトス

第五十二條 二人以上合同シテ現ニ罪ヲ犯スノ際其一人又ハ
數人臨時他罪ヲ犯シタル時ハ其罪ヲ他ノ犯人ニ及ホス可キ
モノニ非ス然レトモ本罪ニ關係シタル事件ニシテ他ノ犯人
之ヲ豫知シタル時ハ其罪ヲ免カルコトヲ得ス

第五十三條 二人以上合同シテ罪ヲ犯シタル時其一人又ハ數
人幼年若クハ知覺精神ノ喪失等ニ因リ減免ヲ得ルト雖モ他
ノ犯人ハ其利益ヲ得可キモノニ非ス

第五十四條 教唆者ノ罪ハ脅迫贈與威權結約其他被教唆者ヲ

シテ犯罪ノ意ヲ決定セシムルニ足ル可キ方法ヲ用ヒ且被教唆者其事ヲ實行スルニ因テ成立ス

若シ被教唆者ノ犯シタル罪全ク異質ニシテ教唆ヨリ出タルモノニ非サル時ハ教唆者ノ罪成立セス

第五十五條 從犯ハ正犯ヲ幫助シ犯罪ヲ容易ナラシムル者ニシテ器具ヲ給與シ又ハ誘導指示スル等ノ別アリト雖モ其所爲ハ毎ニ犯罪着手ノ前ニ在リ若シ犯罪ノ當時直接ニ幫助スル者ハ即チ正犯ニシテ從犯ト爲ス可カラス

第五十六條 從犯ノ罪ハ正犯ノ罪ト同時ニ成立ス故ニ正犯現ニ其事ヲ行ハス又ハ之ヲ行フモ罪ト爲ラサル時ハ從犯亦罪ナシトス但正犯ノ身分ニ因リ不論罪ト爲ル場合ハ此限ニ在ラス

第五十七條 犯罪ヲ容易ナラシムル爲メ器具ヲ給與シ又ハ誘

導指示スト雖モ正犯其器具ヲ使用セス又ハ其誘導指示ニ從ハサル時ハ正犯ノ罪成立スルモ從犯ノ罪成立セス

正犯其器具ヲ使用シ又ハ其誘導指示ニ從フト雖モ全ク異質ノ罪ヲ犯シ從犯其事實ヲ豫知セサル時亦同シ

第五十八條 共犯罪一般ノ成立ハ前數條ニ記載シタル如シト雖モ酒造稅則煙草稅則ノ如キ收稅ニ關スル罰例及ヒ古物商取締條例賣屋取締條例ノ如キ營業取締ニ關スル罰例ニ於テハ止々其營業者ヲ罰シ爆發物取締罰則新聞紙條例集會條例ノ如キ治安ニ關スル罰例ニ於テハ共犯ノ區域ヲ擴メ又ハ特定ノ者ノミヲ罰スル等ノ特例アリ其他諸罰則ニ於テハ共犯ノ特例アルモノ多シ

第四節 不論罪及ヒ刑ノ全免

第五十九條 不論罪トハ外形上犯罪タル可キノ所爲アリト雖

不論罪及ヒ刑ノ全免

モ法律上之ヲ罪トセサルモノヲ謂ヒ刑ノ全免トハ犯罪已ニ成立スト雖モ法律上特ニ定メタル事由ノ爲メ全ク其刑ヲ免スルモノヲ謂フ

不論罪及ヒ刑ノ全免ヲ得ヘキモノハ公訴ノ目的ナキニ因リ其事實明瞭ナルニ於テハ捜査ヲ爲ス可キモノニ非ス但不論罪ニシテ徵治場ニ留置ス可キモノハ此限ニ在ラス

第六十條 不論罪ニ二種アリ各種ノ犯罪ニ適用ス可キモノヲ一般ノ不論罪ト謂ヒ特種ノ犯罪ニ適用ス可キモノヲ特別ノ不論罪ト謂フ

第六十一條 一般ノ不論罪ハ左ノ如シ

- 一 抗拒ス可カラサル強制ニ遇ヒ其意ニ非スノ爲シタル者
- 二 天災又ハ意外ノ變ニ因リ避ク可カラサル危難ニ遇ヒ自己若クハ親屬ノ身体ヲ防衛スルニ出タル者

三 法律又ハ長官ノ命令ニ從ヒ其職務ヲ以テ爲シタル者

四 罪ヲ犯ス意ナキ者但法律規則ニ於テ特例アル者ヲ除ク

五 罪ト爲ル可キ事實ヲ知ラサル者

六 知覺精神ヲ喪失シタル者

七 罪ヲ犯ス時十二歳ニ滿タサル者

八 罪ヲ犯ス時滿十二歳以上十六歳ニ滿タスシテ是非ヲ辯別セサル者但違警罪ヲ除ク

九 瘖啞者

第六十二條 前條ニ記載シタル者ハ一般ニ其罪ヲ論セスト雖モ酒造稅則煙草稅則證券印稅規則等ノ諸罰例ニ於テハ全ク不論罪ノ例ヲ適用セス又ハ其一部ヲ適用セサルモノアリ

第六十三條 特別ノ不論罪ハ左ノ如シ

- 一 自己又ハ他人ノ身体生命ヲ正當ニ防衛シ已ムコトヲ得

サルニ出テ暴行人ヲ殺傷シタル者
 但不正ノ所爲ニ因リ自ラ暴行ヲ招キタル者ヲ除ク
 二財産ニ對シ放火其他暴行ヲ爲ス者ヲ防止スル爲メ已ム
 コトヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シタル者
 三盜犯ヲ防止シ又ハ盜賊ヲ取還スル爲メ已ムコトヲ得サ
 ルニ出テ人ヲ殺傷シタル者
 四夜間故ナク邸宅ニ入り若クハ門戶牆壁ヲ踰越損壞スル
 者ヲ防止スル爲メ已ムコトヲ得サルニ出テ人ヲ殺傷シ
 タル者
 五犯罪人ノ親屬ニシテ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメ又ハ
 其罪證ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者
 六祖父母夫妻子孫及ヒ其配偶者又ハ同居ノ兄弟姉妹互ニ
 竊盜ノ罪遺失物理藏物ニ關スル罪詐欺取財ノ罪及ヒ受

寄財物ニ關スル罪ヲ犯シタル者

第六十四條 刑ヲ全免ス可キ場合ハ左ノ如シ

- 一貨幣偽造變造ノ情ヲ知り雇テ受ケタル職工雜役及ヒ房
 屋ヲ給與シタル者其貨幣行使前ニ於テ自首シタル時
- 二偽證又ハ詐僞ノ鑑定通事ヲ爲シタル者其事件ノ裁判宣
 告ニ至ラサル前ニ於テ自首シタル時
- 三惡言ヲ爲シタル者被告人ノ推問ヲ初メサル前ニ於テ自
 首シタル時
- 四地租條例ニ違犯シタル者自首シタル時
- 五竊ニ米穀金銀貨株式及ヒ諸物品ノ限月賣買等ヲ爲シタ
 ル者自首シタル時
- 六富籤賣買ニ關スル犯罪者自首シタル時但役收ス可キ物
 件アル場合ヲ除ク

捜査權ノ停止

第二章 捜査權ノ停止

第六十五條 捜査權ハ犯罪ノ成立ニ起因スルモノニシテ被害者ノ告訴アルト否トニ關係スルコトナシ然レモ人ノ内行若シハ名譽ニ關シ其事ヲ摘發スルニ於テハ却テ害ヲ被害者ニ加フルノミナラス爲メニ一般ノ風俗ヲ敗ルノ恐レアルモノナリ又ハ其害ノ有無被害者ニ非サレハ之ヲ鑑別スルコト能ハス隨テ其犯罪ノ成立セシヤ否ヲ確知スルコトヲ得サルモノアリ故ニ此種ノ犯罪ニ付テハ法律規則ニ於テ特例ヲ設ケ被害者又ハ親屬ノ告訴ヲ待ツ可キモノト定メタルニ因リ其告訴アルマテ捜査處分ヲ停止セサル可カラス

第六十六條 左ニ記載シタル事件ハ被害者ノ告訴ヲ要ス但第九項以下ノ事件ニ付テハ其親屬亦告訴ヲ爲スコトヲ得

一有夫姦ノ罪但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル時ハ告訴ノ効

ナシ

二誹毀ノ罪但死者ヲ誹毀スル罪ニ付テハ其親屬ノ告訴ヲ要ス

三他人ノ所有ニ屬スル牛馬以外ノ家畜ヲ殺ス罪

四公然人ヲ罵詈訶弄スル罪

五他人ノ寫真版權ヲ侵ス罪

六他人ノ商標ヲ冒ス罪

七他人ノ專賣權ヲ侵ス罪

八新聞紙ニ記載シタル事項ノ錯誤ニ付正誤ノ請求ニ應ゼサル罪

九脅迫ノ罪

十幼者ヲ囑取誘拐スル罪但幼者式ニ從テ婚姻シタル時ハ告訴ノ効ナシ又幼者ヲ略取誘拐シテ外國人ニ交付スル

罪ハ告訴ヲ要スルノ限ニ在ラス

十一 猥褻姦淫ノ罪但幼者ノ淫行ヲ勸誘シテ媒合スル罪及ヒ猥褻姦淫ニ因テ人ヲ死傷ニ致ス罪ハ告訴ヲ要スルノ限ニ在ラス

第六十七條 被害者ノ告訴ヲ要スル事件ト雖モ本人無能力ナル時ハ法律ニ定メタル代人ヨリ告訴ヲ爲スモ其効アリトス法律上ノ代人ト雖モ有夫姦ノ罪ニ付テハ本夫白痴瘋癲ナル場合ノ外告訴ノ權ナシ又財産管理人ハ財産ニ關スル犯罪ノ外告訴ノ權ナシ

〔參照〕 明治十四年第七十三號布告

治罪法ニ於テ無能力者法律ニ定メタル代人及ヒ民事擔當人ト稱スル者ハ左ノ通無能力者

一 未丁年者

二 妻タル者

三 白痴瘋癲人

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者

法律ニ定メタル代人

一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬後見人

二 夫タル者

三 白痴瘋癲人ノ保管人

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

民事擔當人

一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲナス者

二 夫タル者

三 白痴瘋癲人、保管人

四 雇主

但雇人其雇主ノ命シタル事件ヲ行フ時

第六十八條 親屬ノ告訴ハ被害者ノ爲メニ之ヲ爲スモノナル
テ以テ被害者ノ意思ニ反スル告訴ハ其效ナシ

捜査權ノ消滅

第三章 捜査權ノ消滅

第六十九條 捜査權ノ公訴權ト其起因ヲ同クスルノミナラス
亦同一ノ理由ニ因テ消滅ス故ニ其消滅ハ治罪法第九條ニ記
載シタル公訴權消滅ノ場合ト差異ナキモノトス

第七十條 捜査權消滅シタル時ハ捜査ニ着手ス可カラス既ニ
着手シタル場合ニ於テハ之ヲ繼續ス可カラス故ニ捜査權ノ
起因ニ注意スルト同時ニ其消滅ノ原因ニ注意ス可シ

被告人ノ死去

第一節 被告人ノ死去

第七十一條 刑ハ其人ニ止リテ他人ニ及ハス故ニ被告人死去
スルトキハ公訴權消滅スルヲ以テ其捜査權亦消滅ス

七十二條 數人共犯ノ場合ニ於テハ被告人死去スル者アリ
ト雖モ他ノ正犯從犯ニ付テハ捜査權消滅スル者ニ非ラス

告訴ノ棄權私和

第二節 告訴ノ棄權私和

第七十三條 告訴ノ棄權私和ニ因リ捜査權ノ消滅スルハ第六
十六條ニ記載シタル事件ニ限ルモノニシテ其他ノ事件ニ付
テハ棄權私和アリト雖モ捜査權消滅スルモノニ非ラス

第七十四條 告訴ノ棄權私和ハ始審終審ヲ問ハス本案ノ裁判
言渡ニ至ルマテ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第七十五條 法律ニ定メタル代人ハ告訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ
事件ニ付テハ其棄權私和ヲ爲スコトヲ得
親屬ハ被害者ノ意思ニ反シ棄權私和ヲ爲スコトヲ得ス

第七十六條 告訴ノ棄權私和ハ被告事件全部ニ係ルモノナルヲ以テ數人共犯ノ場合ニ於テ其一人ニ對シ棄權私和ヲ爲シタルトキハ他ノ被告人亦其利益ヲ受クルモノトス

確定裁判

第三節 確定裁判

第七十七條 確定裁判ヲ經タル事件ハ被告人ノ利益ノ爲メ非常上告再審ノ訴ヘアリタル場合ノ外罪名ノ變更アルモ再理ス可カラサルニ因リ其捜査權亦消滅ス

第七十八條 確定裁判トハ上訴期限ヲ經過シ又ハ上訴ヲ經盡シテ復タ之ヲ動カス可カラサルモノヲ謂フ故ニ裁判ヲ經ルト雖モ上訴期限内及ヒ上訴中ニ於テハ捜査權消滅セス

第七十九條 確定裁判ニ因テ捜査權ノ消滅スルハ公判本案ノ言渡及ヒ豫審免訴ノ言渡ニ限ル但豫審免訴ノ言渡確定スト雖モ新ナル證據アルモハ格別ナリトス

刑ノ廢止

第八十條 確定裁判ノ效ハ其裁判ヲ受ケタル者ニ止リ其他ノ者ニ及ハス故ニ共犯人中既ニ確定裁判ヲ經タル者アリト雖モ他ノ犯人ニ付テハ捜査權消滅セス

第四節 刑ノ廢止

第八十一條 法律ハ既往ニ溯ラスト雖モ所犯預布以前ニ在ルモノハ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス故ニ舊法刑名アルモノニ新法之ヲ廢止スルトキハ新法ニ從ヒ不問ニ付ス可キモノナルニ因リ其捜査權亦消滅ス

第八十二條 刑ノ廢止ハ新法ニ於テ之ヲ明示スルモノアリ之ヲ明示セサルモ新法ニ牴觸スルニ因リ廢止ト爲ルモノアリ法律ヲ改正シ舊法中明文アルモノヲ除キタルカ爲メ廢止ト爲ルモノアリ其方法一樣ナラスト雖モ捜査權ノ消滅スルハ同一ナリトス

大赦

第五節 大赦

第八十三條 大赦ハ特赦ノ如ク刑ヲ免スルニ非ス罪ヲ消滅セシムルノ恩典ナリ故ニ大赦ヲ經タル事件ニ付テハ搜查權消滅ス

第八十四條 大赦ハ發令前ノ犯罪ニ限リ發令後ノ犯罪ニ及フ可キモノニ在ラス

公訴ノ期滿免除

第六節 公訴ノ期滿免除

第八十五條 總テ犯罪ハ其種類ニ因リ法律ニ定メタル期限即チ重罪ハ十年輕罪ハ三年違警罪ハ六月ヲ經過スル片ハ公訴ノ期滿免除ヲ得ルニ因リ其搜查權亦消滅ス

第八十六條 期滿免除ノ期限ハ即時犯ニ付テハ犯罪ノ日ヨリ起算シ繼續犯ニ付テハ最終ノ日ヨリ起算シ連續犯ニ付テハ一罪毎ニ犯罪ノ日ヨリ起算ス

第八十七條 即時犯トハ其罪即時ニ終成スルヲ謂ヒ繼續犯ト

ハ同一ノ罪ニシテ多少ノ時日其所爲繼續スルヲ謂ヒ連續犯トハ其意思繼續シテ數次同一ノ罪ヲ犯スヲ謂フ

第八十八條 期滿免除ハ公訴ノ提起及ヒ實行ニ因リ其期限ノ經過ヲ中斷ス故ニ起訴及ヒ豫審公判ノ手續アリタル片ハ其期限ヲ經過スト雖モ期滿免除ヲ得ヘカラス但管轄違以外ノ原由ニ因リ其手續ノ無効ニ屬スル片ハ此限ニ在ラス

第八十九條 期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷シタル場合ニ於テハ其處分以前及ヒ處分中ノ日數ハ期滿免除ノ期限ニ算入スルヲ得ヌ若シ其處分ヲ止メタル片ハ更ニ其日ヨリ期滿免除ノ期限ヲ起算ス

期滿免除ノ期限ノ經過ヲ中斷スト雖モ犯罪ノ日ヨリ起算シテ通常期限ノ二倍ヲ經過スル片ハ期滿免除ヲ得但中斷シテ

其處分ヲ繼續スル場合ハ此限ニ在ラス

第九十條 中斷ノ効ハ被告事件ノ全部ニ及フモノナルヲ以テ
共犯人中一人又ハ數人ニ對シ中斷ノ處分ヲ爲シタルハ未
タ發覺セサル正犯從犯ト雖モ期滿免除ヲ得ヘカラス

捜査着手

捜査着手ノ原由

第三編 捜査着手

第一章 捜査着手ノ原由

第九十一條 捜査ハ適法ノ原由即チ告訴告發現行犯自首新聞
風説其他見聞シタル事物ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ
犯罪アリト思料シタル場合ニ於テ着手ス可キモノトス

第九十二條 適法ノ原由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知思料シタ
ル場合ニ非ラスシテ捜査ニ着手スルハ公安ヲ妨ケ人ノ名譽
ヲ害スル等ノ弊アルヲ以テ妄ニ犯罪アルヘシト豫想シ隱密
探偵等ヲ爲ス可カラス

告訴及ヒ告發

第一節 告訴及ヒ告發

第九十三條 告訴ハ被害者ノ親告ニシテ告發ハ被害者ニ非サ
ル者ノ申告ナリ其名異ナリト雖モ共ニ犯罪アリタルコトヲ
當該官ニ申告スルモノナルニ付キ告訴ト稱ス可キヲ告發ト
稱シ告發ト稱ス可キヲ告訴ト稱シ其他何等ノ名稱ヲ以テス
ルモ其申告ヲ受ケ宜ク其實ニ從テ處分ス可シ

第九十四條 告訴告發ハ如何ナル事件ト雖モ却下ス可キモノ
ニ非ス然レモ法律規則ニ違犯ノ廉ナシト思料シ且其申立ノ
罪名亦輕微ナルハ本人ニ示諭シテ取下ヲ爲サシムルヲ得
得若シ承認セサルハ之ヲ受付シテ相當ノ手續ヲ爲サハル
可カラス

第九十五條 書面ヲ以テ告訴告發ヲ爲シタル場合ニ於テ其旨
趣不明瞭ナルカ又ハ本人ノ意思ニ適合セサルヘシト思料ス

ル片ハ宜ク其取調ヲ爲ス可シ

第九十六條 口述ヲ以テ告訴告發ヲ爲シタル片ハ隨意ニ其事件

ヲ陳述セシメ調書ヲ作り本人ニ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ

第九十七條 告訴告發ニ付増減變更ノ申立アリタル片ハ本人

ヲシテ書面ヲ差出サシメ又ハ其陳述ヲ錄取シ之ヲ讀聞セ共

ニ署名捺印スヘシ

第九十八條 前二條ノ場合ニ於テ本人署名捺印スルヲ能ハサ

ル片ハ其旨ヲ調書ニ付記ス可シ但氏名ヲ代書シ本人ヲシテ

捺印セシムルモ妨ケナシ

第九十九條 告訴告發ヲ受ソル片ハ成ル可ク犯罪ノ性質方法

日時場所被告人證人ノ住所氏名其他證憑及ヒ事實參考ト爲

ル可キヲ申立シム可シ

第一百條 被告人ヲ指名シテ告訴告發ヲ爲シタル片ハ本人ト被

告人トノ關係如何ヲ熟察シ其趣旨ニ出ルヲナキヤ否ニ注意

ス可シ又告訴人ノ如キハ一時ノ忿怒ニ因リ過實ノ申立ヲ爲

スヲナキヲ保シ難キヲ以テ成ル可ク失誤ナキヲニ注意セシ

ムヘシ

第一百一條 告訴ヲ受ケタル證書ハ告訴人ノ請求アルニ非サレ

ハ之ヲ渡スニ及ハス

第一百二條 代人ノ告訴告發ニ係ル時ハ委任狀ヲ差出サシム可

シ但法律ニ定メタル代人告訴ヲ爲ス片ハ此限ニ在ラズ

第一百三條 告訴告發ノ願下アルモ其書面ハ却下スル者ニ非テ

ス更ニ本人ノ署名捺印シタル願下申立書ヲ差出サシム可シ

口述ヲ以テ願下ヲ爲ス片ハ其申立ヲ錄取シ本人ヲシテ署名

捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル片ハ第九十八

條ノ例ニ從フヘシ

第四百四條 官吏職務上ノ告發ハ其署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲スヘキモノナリト雖モ急速ヲ要スル場合ニ於テハ電信又ハ口述ノ告發ヲ受クルモ妨ケナシ

第四百五條 告訴ヲ受クヘキ管轄官吏左ノ如シ

- 一 重罪輕罪ニ付テハ犯罪ノ地若クハ被告人住所ノ地ノ豫審判事檢察司法警察官
- 二 違警罪ニ付テハ犯罪ノ地ノ違警罪裁判所檢察官司法警察官

第四百六條 告發ヲ受ク可キ管轄官吏左ノ如シ

- 一 重罪輕罪ニ付テハ告發人所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ豫審判事檢察司法警察官
- 二 重罪輕罪ニ付官吏職務上ノ告發ハ其職ヲ行フ地ノ檢察
- 三 違警罪ニ付キ官吏職務上ノ告發ハ犯罪ノ地ノ違警罪裁

判所檢察官司法警察官

第四百七條 重罪輕罪ニ付官吏職務上ノ告發ハ其職務ヲ行フ地ノ司法警察官其取次ヲ爲スヲ得

第四百八條 告訴告發ヲ受ケタル官吏ハ第四百四十二條以下ノ區別ニ從ヒ速ニ其事件ヲ送致ス可シ但豫審判事治罪法第一百十四條以下ノ場合ニ於テ相當ノ處分ヲ爲スハ格別ナリトス

第四百九條 檢察司法警察官ハ告訴告發ニ係ル事件ノ摸樣ニ因リ搜查ニ着手スルト否トヲ定ム可シ

第一百十條 檢察ノ告訴告發ヲ受ケ起訴ノ手續ヲ爲サ、ルキハ控訴裁判所檢察長ニ於テ更ニ其告訴告發ヲ受ケ相當ノ處分ヲ爲スヲ得

現行犯

第二節 現行犯

第一百十一條 現行犯ハ罪ト爲ルヘキ所爲又ハ其犯人ヲ認メ得

ヘキ有形上ノ模様アルモノニシテ特別處分ノ制限トス

第一百十二條 重罪輕罪違警罪ヲ分タス現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタルモノヲ現行犯トス

現ニ行フ際トハ罪ト爲ルヘキ所爲ノ繼續スル時間ヲ謂ヒ現ニ行ヒ終リタル際トハ罪ト爲ルヘキ所爲ヲ止メタル當時又ハ之ヲ止メタルヨリ些少ノ時間ヲ經過スルモ其痕跡現存シテ犯狀ヲ認ムルニ容易ナル時間ヲ謂フ

發覺トハ犯人ノ誰タルコトヲ知ラスト雖モ當該官ニ於テ其事件ヲ覺知シテ處分ニ着手シ又ハ常人之中覺知シテ當該官ノ處分ニ供スルヲ謂フ

第一百十三條 重罪輕罪ニ付テハ現行犯ニ准ス可キモノアリ其場合左ノ如シ

一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時此場合ニ於

テハ犯人トシテ追呼スル者及ヒ追呼セラレテ遁逃スル者アルヲ要ス然レモ犯罪者タルコトヲ詰ルニ當リ直ニ遁逃スル片ハ別ニ追呼者アルヲ要セス
二 兇器贓物其他犯罪ニ關スル物件ヲ携帶シ犯人ト思料ス可キ時

三家宅内ノ犯罪ニシテ戶主又ハ戶主ニ代ル可キ者ヨリ其檢証又ハ其家宅内ニ在ル被告人逮捕ノ處分ヲ當該官ニ請求シタル時

第一百十四條 前條ニ記載シタル場合ノ外犯人ト思料ス可キ舉動アル片ハ亦現行犯ニ准スルコトヲ得此場合ニ於テハ專ラ當該官ノ思料ニ任スト雖モ充分ナル因由徵憑ナカル可カラス
〔參照〕 明治十四年第四十六號布告

第四項 治罪法第一百一條ニ准現行犯、場合列記有之候處其

舉動犯人ト思料スヘキ者アルハ當分ノ内現行犯ニ准シ
處分スルヲ得

特種ノ發見

第三節 特種ノ發見

第一百五條 告訴發現行犯ノ外自首新聞風説其他見聞シタ
ル事物ニ因リ犯罪アルヲ認知思料スルヲ特種ノ發見トス
第十六條 自首ハ悔悟又ハ減刑ノ企望ニ出ツルモノ多シト
雖モ或ハ他人ノ罪ヲ免カレシムル爲メ自ラ隠ヒ或ハ重キ罪
ヲ避クルノ意ヲ以テ輕キ罪ヲ首出スル等ノ事ナシトセス宜
ク其虛實及盡不盡ヲ視察ス可シ

第十七條 新聞紙上犯罪事件ヲ記載シ又ハ犯罪アリタルノ
風説アルハ其出所原因等ヲ取調ヘ其虛實ヲ視察ス可シ
第十八條 變死創傷及ヒ隱藏物件等ヲ發見シタルハ其犯
罪ニ原因シタルヤ否ヲ視察ス可シ

捜査着手ノ心得

第二章 捜査着手ノ心得

第十九條 犯罪アレハ必ス捜査權アリ然レモ其實行ニ至テ
ハ事ノ輕重ニ因リ寬嚴其度ニ適セサル可カラス故ニ犯罪ア
ルヲ認知思料スル時ハ先ツ其全體ヲ通觀シ其關係ヲ熟察
シテ事實適當ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十條 人ノ内行ニ關シ若クハ親屬間ニ生スル犯罪又輕
微ナル犯罪ニシテ其害一般ニ及ハサル場合ニ於テ一概ニ之
ヲ檢舉スル時ハ却テ安寧風俗ヲ害スルヲアルニ因リ其土俗
民情等ヲ熟察シ捜査權ヲ實行スルト否トヲ定ム可シ

第二十一條 刑法第二編第一章ニ記載シタル犯罪ハ固ヨリ
之ヲ嚴罰セサル可カラス然レモ其事實ヲ精査セス濫ニ之ヲ
檢舉スルハ却テ法律ノ趣旨ニ反ス故ニ捜査着手前充分ノ注
意ヲ爲シ決シテ輕忽ノ處分ヲ爲ス可カラス

第二百二十二條 刑法第二編第二章ニ記載シタル犯罪ハ機先ヲ察知シテ其陰謀又ハ豫備中ニ防制スルヲ要ス然レモ其陰謀ニ係ルモノ、如キハ証憑ヲ得ル極メテ難シ若シ捜査ニ着手シテ証憑ヲ得サル時ハ却テ不良ノ結果ヲ生スルニ因リ輕忽ニ人ノ身体財産ニ對スル處分ヲ爲スコカラス

第二百二十三條 官吏ノ犯罪ハ固ヨリ寬假ス可キモノニ非ス然レモ捜査處分其當ヲ得サル時ハ施政上妨害ヲ生スルヲアルヲ以テ被告人官等ノ高下事件ノ大小ヲ問ハス充分ノ注意ヲ爲スコシ

第二百二十四條 外國人ノ犯罪ハ其處分ノ當否ニ因リ重大ノ關係ヲ生スルヲアルヲ以テ事件ノ大小ヲ問ハス失誤ナキヲ勉メサル可カラス

第四編 捜査處分

捜査處分

第二百五條 捜査處分ハ犯罪ノ原由性質方法情狀日時場所被害ノ形狀多寡被告人ノ氏名年齢職業住所身分品行前科ノ有無及ヒ証人ノ誰タルヲ其他証憑ト爲ル可キ一切ノ事物ヲ取調フルニ在リ

第二百二十六條 捜査處分ハ公力ヲ以テ執行スヘキモノニ非ラス故ニ家宅ヲ搜索シ物件ヲ差押ヘ又ハ被告人ヲ引致スルハ特定ノ場合ニ非サレハ之ヲ爲スヲ得ス

第二百二十七條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ現行犯ト雖モ其事件ノ摸樣ニ因リ假豫審ノ處分ヲ必要トセサル場合ニ於テハ捜査處分ヲ以テ其取調ヲ爲スコシ

第二百二十八條 捜査處分ハ本編ニ記載シタルモノ、外第五編ニ定メタル手續ヲ准用スルヲ得但其手續特ニ豫審處分ニ屬スルモノハ此限ニ在ラス

證憑及ヒ犯人ノ捜査

第一章 證憑及ヒ犯人ノ捜査

第二百二十九條 犯罪ノ場所又ハ證憑物件所在ノ場所ニ臨檢スルヲ必要トスル場合ニ於テハ其處分ヲ爲スヲ得但人ノ邸宅内ニ係ル時ハ其戸主又ハ管守者ノ承諾ヲ得ルヲ要ス

第三百十條 犯罪ノ事實ヲ證明ス可キ物件ハ所有者又ハ保管者ノ承諾アル時ハ之ヲ領置スルヲ得

第三百十一條 官署内ニ於テ前二條ノ處分ヲ爲サントスル時ハ其長官ノ許諾ヲ得ルヲ要ス

第三百十二條 現行犯ト非現行犯トヲ問ハス又臨檢シタル場合ト否トニ拘ハラズ捜査上必要トスル時ハ證人鑑定人及ヒ被告人ヲ呼出シ又ハ其所在ニ就キ取調ヲ爲スヲ得

第三百十三條 呼出ヲ爲スニハ報知書ヲ用フ可シ但時宜ニ因リ巡查憲兵卒又ハ小使等ヲシテ口達セシムルモ妨ケナシ

第三百十四條 報知書ハ巡查憲兵卒又ハ小使等ヲシテ送致セシメ若クハ郵便ヲ以テ送致ス可シ

第三百十五條 證人ヲ取調フルニハ宣誓ヲ用ヒス其陳述ハ之ヲ録取シ一件書類ニ添置ク可シ但事實簡單ナルカ又ハ本人ノ希望アル時ハ手續書若クハ始末書ヲ差出サシムルモ妨ケナシ

第三百十六條 鑑定ヲ爲サシムルニハ宣誓ヲ用ヒス其結果ハ鑑定書ニ記載シ之ヲ差出サシム可シ

第三百十七條 物件ノ原形ヲ變スルニ非サレハ鑑定ヲ爲ス不能ハサル場合ニ於テ其物件重要ナル證憑ト爲ル可キモノナル時ハ捜査上鑑定ヲ爲サシム可カラズ但腐敗其他ノ原由ニ因リ其物件ヲ保存ス可カラサル時ハ此限ニ在ラス

第三百十八條 捜査上被告人ヲ取調フルヲ得ルト雖モ輕

忽ニ着手スル時ハ人ノ名譽ヲ毀損シ又ハ被告人逃走證憑湮滅ヲ招クノ恐アリ宜ク犯罪ノ種類被告人ノ身分及ヒ情狀等ヲ斟酌ス可シ

第三百三十九條 被告人ノ誰タルヲ知リ得サル場合ニ於テ之ヲ搜索スルノ方法ハ固ヨリ豫定シ難シト雖モ犯罪ノ方法遺留ノ物件等ニ因リ先ツ其所爲ノ巧拙被告人ノ職業及ヒ其員數等ヲ鑑別スルヲ緊要トス

第四百十條 前條ニ記載シタルノ外新聞風説其他古物商質屋兩替屋旅籠屋飲食店貸坐敷ニ於テ被告人發見ノ端緒ヲ得ルヲ少カラス宜ク注意ス可シ

第二章 被告事件交付

第四百十一條 犯罪搜查ハ成ル可ク事件ノ大体ニ注意シ其要領ヲ得タル時ハ左ノ各條ニ從ヒ被告人事件交付ノ手續ヲ爲

被告事件交付

ス可シ但交付後ト雖モ仍ホ搜查ヲ爲スヲ得
被告事件ヲ交付スル時ハ證憑物件ヲ添へ且參考ト爲ル可キ事項ヲ通知ス可シ

第四百十二條 豫審判事司法警察官重罪輕罪ノ搜查ヲ爲シタル時ハ速ニ其事件ヲ檢事ニ送致ス可シ

第四百十三條 檢事自ラ重罪輕罪ノ搜查ヲ爲シ又ハ豫審判事司法警察官ヨリ其送致ヲ受ケタル場合ニ於テハ治罪法第七條ニ從ヒ相當ノ手續ヲ爲ス可シ

第四百十四條 違輕罪ニ付テハ其搜查ヲ爲シタル者ヨリ直ニ管轄警察署ニ送致ス可シ

第四百十五條 陸海軍人軍屬ノ犯罪ニ係ル時ハ其搜查ヲ爲シタル者ヨリ直ニ管轄法衙ノ檢察官又ハ被告人ノ所屬長ニ送致ス可シ但憲兵設置ノ地方ニ於テハ違警罪ニ限り憲兵屯所

ニ送致ス可シ

第四百四十六條 軍人軍屬任官者クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺シタル者又ハ歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺シタル者ハ亦前條ノ手續ニ從フ可シ

其在官現役中又ハ召集中罪ヲ犯シ免官免役若クハ解散ノ後發覺シタル者ハ常人ノ例ニ同シ

〔參照〕陸軍治罪法第十八條及海軍治罪法第十八條

第四百四十七條 外國人ノ犯罪ニ付テハ其搜查ヲ爲シタル者ヨリ管轄領事廳所在ノ地ノ檢事ニ送致シ檢事ヨリ領事ニ其處分ヲ請求ス可シ但領事廳所在ノ地方ニ於テハ其搜查ヲ爲シタル者ヨリ直ニ其處分ヲ請求スルコトヲ得

朝鮮國人及ヒ條約未濟國人ノ犯罪ニ係ル時ハ第四百四十二條

以下ノ手續ニ從フ可シ

〔參照〕明治九年司法省甲第十二號布達

明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中今般左ノ通り相定候條此旨布達候事

第一條 內國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事并ニ民刑附帶ノ

訴訟ハ檢事其他ノ警察官東京ニテハ警視廳 其ニ於テ之ヲ他ノ府縣ハ地方官

承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ヘ照會シ裁判ヲ求ム可シ

第五編 假豫審

第四百四十八條 司法警察官重罪輕罪ノ現行犯准現行犯ニ付キ治罪法第二百五條ノ處分ヲ爲スヲ假豫審トス

第四百四十九條 現行犯ニ付テハ被告人ヲ逮捕シタルト否トチ問ハス假豫審處分ヲ爲スコトヲ得

假豫審

第五百十條 准現行犯ニ付テハ被告人ヲ逮捕シ之ヲ訊問シタル後ニ非サレハ其他ノ假豫審處分ヲ爲スコトヲ得ス
數人共犯ノ場合ニ於テ一人ヲ逮捕シタル時ハ他ノ正犯從犯ニ對シ假豫審處分ヲ爲スコトヲ得

家宅内ノ犯罪ニ付キ戸主又ハ戸主ニ代ル可キ者ノ請求ニ因リ檢證處分ヲ爲シタル時ハ被告人ヲ逮捕セスト雖モ其他ノ假豫審處分ヲ爲スコトヲ得

第五百十一條 現行犯ノ豫審ハ治罪上ノ特例ニシテ司法警察官假豫審ヲ爲スハ又其特例ナルヲ以テ犯罪ノ性質被告人ノ身分等ニ因リ急速ノ處分ヲ要セサル時ハ假豫審ヲ爲ス可カラス
又假豫審ニ着手シタル場合ト雖モ成ル可ク急速ヲ要スル處分ニ止ム可シ

第五百十二條 假豫審ニ着手シタル事件ト雖モ一タヒ其手續ヲ止メタル時ハ復タ假豫審處分ヲ爲スコトヲ得ス

第五百十三條 假豫審ニ着手シタル場合ニ於テ豫審判事又ハ檢事其處分ヲ爲サントスル時ハ速ニ之ヲ讓ル可シ

第五百十四條 假豫審ニ於テハ犯罪ノ方法性質日時場所其他犯罪ニ關スル證憑ニ付キ取調ヲ爲スノミナラス被告人ノ利益ト爲ル可キ證憑ニ付テモ亦其取調ヲ爲ス可シ

第五百十五條 假豫審ニ關スル調書其他ノ書類ハ司法警察官自ラ之ヲ作ル可シ但時宜ニ因リ巡查憲兵卒等ヲシテ筆記セシムルハ妨ケナシ

書類ヲ作ルニハ文飾ヲ用ヒス簡明平易ニシテ事實ヲ失ハサルコトヲ旨トス可シ

第五百十六條 假豫審ニ關スル書類ニハ所屬官署ノ印ヲ用ヒ

年月日場所ヲ記載シテ署名捺印シ每葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用フルト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ

又書類ヲ作ルニハ文字ヲ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入ヲ爲ス時ハ之ニ認印シ其字數ヲ記載ス可シ但削除ノ部分ハ讀得ヘキ爲メ其字體ヲ存ス可シ

第二百五十七條 假豫審處分ヲ爲シタル時ハ第四百四十一條以下ニ從ヒ被告事件交付ノ手續ヲ爲ス可シ

第二百五十八條 假豫審ニ着手シタル後其取調ヲ繼續ス可キモノニ非スト思料スル時ハ速ニ其手續ヲ止メ被告人ヲ逮捕シタル場合ニ於テハ直ニ之ヲ放免シ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

第一章 檢證及ヒ物件差押

第二百五十九條 假豫審ニ付キ事實發見ノ爲メ必要トスル時ハ

檢證及ヒ物件差押

犯所若クハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第六十條 檢證處分ニ付テハ被告人ノ家宅ヲ搜索スルトヲ得

又事實ヲ證明ス可キ物件ヲ所持スルノ疑アル時ハ他人ノ家宅ト雖モ搜索ヲ爲ストヲ得

第六十一條 家宅内ニ於テ檢證處分ヲ爲スニハ戶主等ノ承諾ヲ待ツニ及ハスト雖モ成ル可ク檢證前其旨ヲ告知シ且公力ヲ用フルトナキヲ要ス

第六十二條 事實ヲ證明ス可キ物件ヲ所持スル者ト雖モ藏匿ノ情ナキ時ハ成ル可ク家宅搜索ヲ爲サス本人ニ通知シテ其物件ヲ差出サシム可シ

第六十三條 檢證ノ場所ニ於テ發見シタル物件其出所性質形狀用方等ニ因リ被告人ノ人違ナキト又ハ犯罪ノ摸樣ヲ知

ルニ足ル可シト思料シタル時ハ之ヲ差押フ可シ
醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧
侶其身分職業ニ關シ委託ヲ受ケタル秘密ノ書類等ハ其承諾
ヲ得ルニ非サレハ差押ヲ爲スヲ得ス

第六十四條 家宅内ノ檢證ニ付テハ戶主又ハ同居ノ親屬ノ
立會アルヲ要ス若シ其在ラサルカ又ハ白痴瘋癲幼年者ナル
時ハ戶長ヲシテ立會ハシム可シ

第六十五條 官署内ニ於テ檢證ヲ爲ス時ハ其長官又ハ其指
名シタル者ノ立會アルヲ要ス

第六十六條 檢證ヲ爲ス場合ニ於テ被告人其處分ニ立會ヒ
又ハ代人ヲシテ立會ハシメンヲ請求スル時ハ勾留ヲ受ケ
タル被告人ヲ除クノ外之ヲ拒ムヲ得ス
又處分上必要トスル時ハ勾留ヲ受ケタル被告人ト雖モ立會

ヲ爲サシムルヲ得

第六十七條 檢證ヲ爲ス場合ニ於テ必要トスル時ハ其場所
ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽キ又ハ鑑定人ヲシテ鑑定ヲ爲サシム
ルヲ得

第六十八條 家宅内ノ檢證ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得
ス但晝間其處分ニ着手シタル時ハ夜間ニ及フモ妨ケナシ
急速ヲ要スル場合ニ於テ戶主ノ承諾アリタル時ハ何時ニ拘
ハラヌ檢證ヲ爲スヲ得

第六十九條 芝居人寄席飲食店湯屋游船宿待合茶屋ノ類ハ
日出前日役後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸坐敷ハ日
出前日役後ニ拘ラス檢證ヲ爲スヲ得

〔參照〕 明治十四年第六十四號布告

第五項 治罪法第三百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制ハ有之

候へトモ芝居人寄席飲食店湯屋游船宿待合茶屋ノ類ハ日出
前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貸坐敷ハ日出前
日没後ニ拘ハラス搜索致シ苦シカラヌ

第七十條 家宅内ニ於テ現ニ重罪輕罪ヲ犯ス者アル時ハ何
時ニテモ其現場ニ限リ立會人ナシクテ檢證ヲ爲スヲ得但
犯罪ノ用ニ供シタル物件ヲ除クノ外立會人アルニ非サレハ
差押ヲ爲スヲ得ヌ

第七十一條 家宅内ノ檢證ヲ爲スニハ成ル可ク穩當ノ方法
ヲ用ヒ濫ニ門戶牆壁器具等ヲ損壞スルヲナキヲ要ス
又其處分ヲ終リタル時ハ書類物件ノ紛失毀損ヲ防ク爲メ相
當ノ處置ヲ爲ス可シ

第七十二條 家宅搜索ヲ爲スニハ其目的トスル所ノ書類物
件ヲ藏ヌ可シト思料スル器具ノ外濫ニ開披ス可カラヌ

第七十三條 檢證處分中雜沓喧噪其他妨害ヲ爲ス者アル時
ハ之ヲ制止ス可シ
又何人ニ限ラス允許ヲ得シテ其場所ニ出入スルヲ禁ス
ルヲ得若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終
ルマテ留置スルヲ得

第七十四條 檢證ハ其處分ヲ終ルマテ停止セサルヲ要ス若
シ已ムヲ得サル事故アリテ之ヲ停止スル時ハ證憑湮滅ヲ
豫防スル爲メ塲所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クコトヲ
得

第七十五條 檢證處分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作り之ヲ立會
人ニ讀開カセ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハ
サル時ハ其旨ヲ附記ス可シ
物件差押ヲ爲シタル時ハ其品目ヲ調書ニ記載シ又ハ別ニ目

録ヲ作り立會人又ハ所有者ニ其稜書又ハ謄本ヲ渡ス可シ
第七十六條 檢證調書ニハ左ノ條件其他檢證ニ關スル一切ノ手續ヲ記載ス可シ

一 檢證ヲ爲シタル年月日場所及ヒ檢證時間

二 犯罪ノ性質方法日時場所被告人ノ人違ナキトテ證明ス

可キ模様及ヒ被告人ノ利益ト爲ル可キ模様

三 被告人ノ氏名若シ分明ナラサル時ハ容貌体格

四 被告人證人ノ陳述但別ニ陳述書ヲ作りタル時ハ之ヲ添

付シ其旨ヲ附記ス可シ

五 差押ヘタル物件但別ニ目錄ヲ作りタル時ハ之ヲ添付シ

其旨ヲ附記ス可シ

第七十七條 差押ヘタル物件ハ散佚毀損ヲ防ク爲メ認印若シハ封印ヲ爲シ且其差押ヲ爲シタル年月日及ヒ件名ヲ記シ

其物件ニ添付ス可シ

又運搬シ難キ物件ニ係ル時ハ看守者ヲ付スル等便宜ノ處置ヲ爲ス可シ

第七十八條 事實發見ノ爲メ必要トスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署又ハ會社ニ照會シテ被告人又ハ關係人ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書類電報其他ノ物件ヲ差押フルコトヲ得但書類電報ハ檢事ノ許可ヲ得ルニ非サレハ開披ス可カラヌ

第七十九條 差押ヘタル物件ト雖モ裁判所ニ送致スルニ及ハサルモノト認ムル時ハ所有者又ハ保管者ニ假渡ヲ爲シ其受取證書ヲ差出サシム可シ

第二章 證人訊問

第八十條 假豫審ニ付事實發見ノ爲メ必要トスル片ハ證人

證人訊問

ヲ呼出シ又ハ其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ
證人檢證ノ場所ニ在ル片ハ直ニ訊問ヲ爲スヲ得

第百八十一條 證人ヲ呼出スニハ呼出狀ヲ發スヘシ但時宜ニ
因リ第百三十三條第百三十四條ノ手續ニ從フモ妨ケナシ
第百八十二條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所職業出頭ノ日時場
所及ヒ被告事件ヲ記載ス可シ

又呼出狀ニ應セサル片ハ罰金ヲ言渡サレ且勾引スルコアル
可キ旨ヲ記載ス可シ
呼出狀ハ治罪法第十九條ニ定メタル路程ノ猶豫ノ外其送達
ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ與フ可シ

〔參照〕明治十五年第七號布告

治罪法第十九條第二項海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割合ヲ
以テ一日ヲ加ラルモノト定ム

第百八十三條 呼出狀ハ二通ヲ作り巡查憲兵卒ヲシテ送達セ
シム可シ但時宜ニ因リ其官署所屬ノ小使等ヲシテ送達セシ
ムルモ妨ケナシ
何レノ場合ニ於テモ送達ノ手續ハ第二百七十六條ニ從ハシ
ム可シ

第百八十四條 證人呼出狀ニ應セサル片ハ再度ノ呼出狀ヲ發
シ又已ムコトヲ得サル場合ニ於テハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得
第百八十五條 證人初度又ハ再度ノ呼出狀ニ應セサル片ハ其
旨ヲ檢事ニ告發ス可シ

第百八十六條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出狀ニ
應スル能ハサルコトヲ證明シタル片ハ前條ノ告發ヲ爲ス可カ
ラス既ニ告發ヲ爲シタル場合ニ於テ速ニ其旨ヲ檢事ニ通知
スヘシ

第百八十七條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル
并ハ其所屬長官ニ照會シテ其出頭ヲ請求スルコトヲ得
皇族勅任官ハ如何ナル場合ト雖モ證人トシテ呼出スコトヲ得
ス

第百八十八條 證人ヲ訊問スルニハ其身分年齢如何ニ拘ハラ
ス宣誓ヲ爲サシム可カラス

第百八十九條 證人ニハ先ツ其氏名年齢身分職業住所及ヒ被
告人又ハ被害者トノ關係如何ヲ訊問ス可シ

第百九十條 證人ヲ訊問スルニハ成ル可ク解シ易キ言語ヲ用
ヒ濫ニ法律ノ成語等ヲ用フ可カラス

第百九十一條 證人ニハ自由ニ陳述セシム可シ其陳述ニ對シ
辯駁討論ヲ爲ス可カラス

若シ其陳述他岐ニ涉ル并ハ之ヲ止メ齟齬アル并ハ之ヲ質ス

可シ

第百九十二條 證人ハ被告人又ハ他ノ證人ト同時ニ訊問スル
并ハ成ハ愛憎畏懼ノ心ヲ生シ又ハ他ノ陳述ニ雷同スルコト
アルヲ以テ成ル可ク各別ニ訊問ス可シ

第百九十三條 證人ハ時宜ニ因リ被告人及ヒ他ノ證人ト對質
セシムルコトヲ得ルト雖モ對質ノ際或ハ言語形容ヲ以テ恐喝
依囑シ又ハ通謀指示スル等ノ弊アルニ因リ成ル可ク對質ヲ
爲サシム可カラス

若シ已ムコトヲ得ヌシテ對質ヲ爲サシムル場合ニ於テハ互ニ
直接ノ辯論ヲ爲サシム可カラス又問ハサル事項ニ付陳述ヲ
爲サシム可カラス且速ニ對質ヲ完結スルコトニ注意ス可シ

第百九十四條 證人ヲシテ證據物件ニ付キ證明セシムルコトヲ
要スル并ハ成ル可ク其物件ヲ示ス可シ

第九十五條 証人ヲシテ犯所若クハ其他ノ場所ニ付キ証明セシムルヲ要スルルハ其場所ニ同行スルヲ得

第九十六條 証人又ハ對質人、譯ナルルハ書面ヲ以テ問ヒ、譯ナルルハ書面ヲ以テ答ヘシム可シ
譯者、譯者文字ヲ知ラサルルハ通事ヲ命ス可シ、國語ニ通セサル者ニ付テモ亦同シ

第九十七條 証人對質人ノ陳述ニ付テハ、訊問ノ順序ヲ逐ヒ即時ニ調書ヲ作ル可シ
調書ハ証人對質人ニ讀聞カセ相違ナキヤ否ヤヲ問ヒ署名捺印セシメ、若シ署名捺印スルヲ能ハサルルハ其旨ヲ附記シ、可シ但對質人ニハ對質ニ關スル部分ノミヲ讀聞カス可シ
証人對質人其陳述ヲ變更増減センヲ請求スルルハ更ニ其陳述ヲ聽キ調書ヲ作ル可シ

鑑定

第三章 鑑定

第九十八條 假豫審ニ付犯罪ノ性質方法等ヲ分明ナラシムル物メ鑑定ヲ必要トスルルハ醫師、穩婆、化學士、鑑定人、彫刻師、其他學術職業ニ因リ適當ノ識能ヲ有スル者ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

第九十九條 死屍ノ解剖毒藥ノ分析其他物件ノ原形ヲ變ヌ可キ鑑定ハ、腐敗又ハ滅盡シ易キ物件ニシテ保存ノ道ナク若クハ犯罪ノ成立ヲ確認スルニ由ナキ場合ニ非サレハ之ヲ爲サシム可カラス

第二百條 鑑定ノ爲メ死屍ノ解剖又ハ墳墓ノ發掘ヲ必要トスルルハ、檢事ノ許可ヲ受ク可シ、其解剖ハ必要ナル部分ノ外之ヲ爲サシム可カラス

〔參照〕明治十年第二十二號布告

變死ニ係ル屍ヲ警察官吏検査スルルニ於テ解剖ヲ行ハサレ
ハ其致命ノ原由ヲ確知シ難キ旨醫師申立ルルハ檢事出ナキ
地方ハ其ノ許可ヲ受ケ其部分ヲ解剖検査セシムルコトヲ得

第二百一條 鑑定人ヲ呼出スニハ第八十一條以下ノ手續ニ
從ヒ且其呼出狀ニハ云々ノ事件ニ付鑑定ヲ命スル旨ヲ記載
ス可シ但鑑定呼出狀ニ應セサルモ勾引狀ヲ發スルヲ得ス
第九十一條ハ鑑定ヲ爲サシムルニ付テモ亦之ヲ適用ス可
シ

第二百二條 鑑定ハ鑑定人ノ自由ニ任セ其方法ニ付テハ干涉
拘制ス可カラスト雖モ成ル可ク現場ニ立會ヒ其結果ヲ得ル
ヲ注意ス可シ但陰部ニ關スル鑑定ニハ立會ヲ爲ス可カラ
ス

第二百三條 鑑定ノ手續時間及ヒ其結果ハ鑑定人ヲシテ鑑定

書ヲ記載セシメ其結果分明ナラサルルハ其推測スル所ヲ記
載セシムヘシ

若シ數名ノ鑑定人ヲ命シタル場合ニ於テ各意見ヲ異ニスル
ルハ各自ニ鑑定書ヲ作ラシメ又ハ一箇ノ鑑定書ニ其意見ヲ
記載セシム

鑑定書ニハ鑑定セシ年月日ヲ記載シ署名捺印シ每葉ニ契印
セシム可シ

第二百四條 鑑定書不明瞭ナルルハ更ニ其説明書ヲ作ラシメ
鑑定書ニ添置ヘシ

被告人ノ逮捕
及ヒ呼出

第四章 被告人ノ逮捕及ヒ呼出

第二百五條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ現行犯准現行犯ニシテ
被告人現場ニ在ルルハ犯罪ノ場所及ヒ被告人ノ身分如何ニ
拘ハラス直ニ之ヲ逮捕ス可シ但其事件ノ模様ニ因リ急速ノ

處分ヲ必要トセサル片ハ之ヲ逮捕ス可カラス

第二百六條 現行犯准現行犯ニ付キ現場ヨリ被告人ヲ追跡スル場合ニ於テハ其追及シタル場所ノ如何ニ拘ハラス直ニ之ヲ逮捕スルヲ得

第二百七條 被告人ヲ逮捕スルニハ成ル可ク穩當ノ方法ニ從ヒ濫ニ劍銃等ヲ用フ可カラス

被告人兇器ヲ持シ抗拒スル等ノ場合ニ於テ已ムヲ得ス劍銃等ヲ用フルモ自衛ノ區域ヲ踰ユ可カラス

第二百八條 假豫審ヲ爲スヲ得ヘキ場合ニ於テハ現場ニ在ラサル被告人ニ對シ拘引狀ヲ發スルヲ得

被告人他ノ管轄地内ニ在ル片ハ其地ノ司法警察官ニ拘引狀ヲ送致シ其執行ヲ囑託ス可シ

若シ其事件急速ヲ要スル片ハ巡查憲兵卒ヲシテ拘引狀ヲ帶

行セシメ又ハ電報ヲ以テ逮捕ノ處分ヲ囑託スルヲ得其囑託ヲ受ケタル司法警察官ハ其名ヲ以テ勾引狀ヲ發ス可シ

〔參照〕 明治十四年第四十六號布告第七項

治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラス

第二百九條 勾引狀ノ執行ヲ受ケタル被告人ハ護送途中及ヒ勾引狀期限内ノ夜間ニ限リ留置場ニ入置クヲ得

〔參照〕 明治十四年第五十九號布告

治罪法中豫審判事勾留狀ヲ發シ勾引セシメタル被告人ハ時宜ニ依リ其訊問期限四十八時間ニ在ル夜間ニ限リ裁判所又ハ最寄警察署留置場ニ入置ク可シ

第二百十條 勾引狀ノ期限ハ護送途中ノ時間ヲ除キ現ニ被告

人ヲ引致シタル時ヨリ起算シテ四十八時ヲ過ク可カラス若シ其期限ヲ過クルハ勾引狀ヲ發スルニ非サレハ被告人ヲ釋放ス可シ

勾引狀ナクシテ被告人ヲ逮捕シタル場合ニ於テモ亦同シ
第二百一十一條 常人ニ於テ現行犯准現行犯ノ被告人ヲ逮捕シ之ヲ引渡サントスルハ成ル可ク其便宜ヲ計リ速ニ之ヲ受取ル可シ

第二百十二條 現行犯准現行犯ニ付キ巡査憲兵卒又ハ常人ヨリ被告人ヲ受取リタルハ逮捕ノ事由及ヒ申告ノ趣旨ヲ審問シテ其調書ヲ作ル可シ
逮捕ヲ爲シタル者ヨリ始末書又ハ手續書ヲ差出シタル時ハ之ヲ調書ニ添置ク可シ

第二百十三條 現行犯准現行犯ノ被告人ヲ訊問シタル后必要

トスルハ勾留狀ヲ發スルヲ得

第二百十四條 勾留狀ノ期限ハ之ヲ執行シタルヨリ十日ヲ過ク可カラス但被告人ヲ送致スル途中ノ日數ハ期限ニ算入セス

第二百十五條 勾引狀勾留狀ニハ被告事件被告人ノ氏名職業住所及ヒ年月日時ヲ記載ス可シ其氏名分明ナラサルハ容貌體格等ヲ明示ス可シ

又勾留狀ニハ被告人ヲ勾留ス可キ監倉ヲ定示ス可シ

第二百十六條 勾引狀勾留狀ハ巡査憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシム可シ但勾留狀ヲ受ク可キ被告人既ニ留置セラレタルハ第八十三條ニ從ヒ之ヲ本人ニ送達セシム可シ

第二百十七條 勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ其令狀ニ記載シタル監倉ニ勾留ス可シト雖モ取調上必要ナル時間ハ留置場ニ

入置クテ得

第二百十八條 現行犯准現行犯ノ被告人ヲ逮捕シ又ハ之ヲ受
取リタル場合ニ於テ留置スルコトヲ必要トセス又ハ留置ス可
カラサルモノト思料スルハ直ニ被告人ヲ釋放ス可シ既ニ
勾留狀ヲ發シタルハ之ヲ取消シ又ハ責付ヲ爲ス可シ但保
釋ヲ爲スコトヲ得ス

第二百十九條 責付ノ手續ハ明治十四年第四十七號布告及ヒ
明治十六年司法省丙第八號達ニ准ス可シ

〔參照〕 明治十四年第四十七號布告

刑事裁判所ニ於テ被告人ヲ責付スルニハ左ノ手續ニ從フヘ
シ

第一條 被告人ヲ責付スルニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテ
モ呼出ニ應シ出廷セシムヘキノ証書ヲ其裁判所書記局ニ

差出サシム可シ

第二條 責付中被告人ヲ呼出スルハ出廷ヨリ二十四時前ニ
其通知ヲ爲ス可シ

第三條 被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出廷セサル
ハハ檢事ノ意見ヲ聽キ責付ヲ取消ス可シ

〔參照〕 明治十六年司法省丙第八號達

保釋責付中被告人取締方心得ノ儀ニ付キ左ノ通各裁判所へ
相達候條此旨爲心得相達候事

〔參照〕 丁第三十一號達

保釋責付ヲ得タル被告人ハ左ノ取締條件ニ服從セシム可キ
儀ニ付保釋責付ヲ爲スノ際其旨ヲ被告人ニ豫知セシム可シ
但其言渡書ノ紙尾ニ記載印刷スルモ妨ケナシ
第一條 治罪法第二十一條ニ從ヒ假住所ヲ定メ届置ク可キ

「ハ言テ竣タス其裁判所ノ管轄地外ニ旅行スルヲ得ス
若シ己ムテ得サル事由アルハ其旨ヲ檢事ニ申立テ許可
ヲ受ク可シ

第二條 裁判所ノ管轄地内ト雖モ住所外ニ於テ一泊以上滯
在スルハ滯在ノ場所ヲ其家族又ハ同居人ニ通知シ置ク
可シ

若シ同居人アラサルハ其住所ノ地ノ戸長ニ届置ク可シ

第三條 代言人辨護人又ハ代人トシテ法廷ニ出頭シ其他職
會集會等公然ノ場所ニ參會スルヲ得ス

第四條 治罪法第二百二十一條ニ適當スル者及ヒ前數條ノ
規則ニ背キタル者ハ治罪法第二百十六條第二項ニ從ヒ保
釋ヲ取消ス可シ其責付ヲ受ケタル者モ亦同シ

第二百二十條 罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪ニ付テハ現行犯ト雖

モ被告人ヲ逮捕スルヲ得ス若シ其氏名住所分明ナラス又
ハ逃亡ノ恐アルハ直ニ引致スルヲ得

第二百二十一條 被告人ヲ逮捕スルヲ許サス又ハ逮捕スル
ヲ必要トセサル場合ニ於テ其訊問ヲ要スル時ハ之ヲ呼出
スヲ得

第二百二十二條 被告人ヲ呼出スニハ召喚狀ヲ發スヘシ但第
百三十三條第百三十四條ノ手續ニ從フモ妨ケナシ

第二百二十三條 召喚狀ニハ被告事件被告人ノ氏名住所職業
出頭ノ日時場所及ヒ之ヲ發スルノ年月日ヲ記載ス可シ
召喚狀ハ第百八十三條ニ從ヒ之ヲ送達シ路程ノ猶豫ノ外其
送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ與フ可シ

被告人訊問

第五章 被告人訊問

第二百二十四條 假豫審ニ於テハ取證ノ機ヲ失セス且被告人

ノ利益ヲ損セサル爲メ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證及ヒ
證人訊問ニ付キ急速ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス

第二百二十五條 被告人呼出ニ應シ出頭シタル時ハ即時ニ訊
問ヲ爲ス可シ遲クトモ其日ヲ過ク可カラス
被告人呼出ニ應セサル時ハ再度ノ呼出ヲ爲シ又ハ其所在ニ
就キ訊問ヲ爲スヲ得

又時宜ニ因リ被告人ヲ呼出スヲナク直ニ其所在ニ就キ訊問
ヲ爲スモ妨ケナシ

第二百二十六條 被告人ニハ先ツ左ノ事項ヲ訊問ス可シ
一氏名年齢身分職業住所出生ノ地

二前科ノ有無若シ前科アル時ハ其罪名刑名裁判言渡ヲ爲シ
タル廳名及ヒ其年月日

第二百二十七條 被告人ヲ訊問スルニハ穩和ヲ旨トシ且其年

齡身分性質ニ因リ斟酌ス可シ

老幼男女貴賤貧富智愚等ヲ別タス一樣ノ訊問ヲ爲ス可カラ
ス

又恐嚇詐言ヲ用フ可カラスト雖モ機ニ臨ミ諭戒詰責スルハ
妨ケナシ

第二百二十八條 訊問ヲ爲スニハ平易ノ語ヲ用ヒ濫ニ法律ノ
成語等ヲ用フ可カラス又簡明ヲ旨トシ勉メテ疑似ニ涉ル
ヲ避ク可シ

第二百二十九條 被告人ニハ自由ニ發言セシメ其陳述ヲ妨礙
ス可カラスト雖モ成ル可ク贅言ヲ省キ餘事ニ涉ラサルコトニ
注意セシム可シ

第二百三十條 訊問ハ一事項毎ニ其端ヲ更メ成ル可ク同人ニ
數事項ヲ訊問ス可カラス

數罪俱發ノ場合ニ於テハ一罪ノ訊問ヲ終リタル後他罪ニ及
 フ可シ但附帶ノ犯罪ニ付テハ同時ニ訊問スルモ妨ケナシ
 第二百三十一條 數人共犯ノ場合ニ於テハ成ル可ク各別ニ訊
 同シ其通謀ヲ防ク可シ且婦女幼者及ヒ罪狀ノ輕キ者其他輒
 ク事實ヲ吐露ス可シト思料スル者ヲ最初ニ訊問ス可シ
 第二百三十二條 證憑物件ハ時機ヲ計リ之ヲ被告人ニ示シ詳
 ニ其辯解ヲ爲サシム可シ
 第二百三十三條 訊問ハ密行ス可キモノナリト雖モ被告人ノ
 共犯ナルコト又ハ其人違ナキコト其他事實ヲ發見スル爲メ必要
 トスル時ハ他ノ被告人證人其他ノ者ト對質セシムルコトヲ得
 第二百三十四條 第九十三條第九十六條ハ被告人ノ訊問
 及ヒ對質ニ付テモ亦之ヲ適用ス可シ
 第二百三十五條 被告人ノ舉動ハ事實發見ノ端緒ト爲ルコトア

巡查憲兵卒ノ職務

ルニ因リ其言語氣色等ニ注意ス可シ
 第二百三十六條 被告人白狀ヲ爲スト雖モ一概ニ眞實ト做ス
 可カラス必要ナル事項ハ充分ニ訊問ヲ爲ス可シ
 第二百三十七條 訊問ニ付テハ即時ニ其調書ヲ作り問答ノ始
 末及ヒ被告人ノ舉動等遺漏ナク記載ス可シ
 第九十七條第二項第三項ノ手續ハ被告人訊問調書ニ付テ
 モ亦之ヲ適用ス可シ
 第二百三十八條 被告人調書ノ謄本ヲ請求スル時ハ之ヲ下付
 ス可シ
 第六編 巡查憲兵卒ノ職務
 第二百三十九條 巡查憲兵卒ハ犯罪ノ搜查及ヒ假豫審ニ關シ
 テハ司法警察官ノ附屬トス
 第二百四十條 巡查憲兵卒ハ搜查及ヒ假豫審ニ付キ司法警察

官ノ指揮アリタル時ハ何事ニ限ラス速ニ其指揮ニ從フ可シ
 第二百四十一條 巡査憲兵卒ハ自ラ告訴告發ヲ受クルコトヲ得
 スト雖モ司法警察官ニ差出ス可キ告訴狀告發狀ハ其取次ヲ
 爲スコトヲ得

第二百四十二條 巡査憲兵卒ハ司法警察官ノ指揮アルニ非サ
 レハ犯罪ノ探索ヲ爲ス可カラス若シ犯罪ヲ發見シタル時ハ
 速ニ司法警察官ニ報告ス可シ

第二百四十三條 巡査憲兵卒ハ其身分ヲ明記シタル證票ヲ携
 帶ス可シ若シ其處分ヲ受クル者ノ請求アル時ハ之ヲ示ス可
 シ

第二百四十四條 巡査憲兵卒ハ其所屬ヲ異ニスト雖モ同一ノ
 職務ヲ行フモノナルニ因リ其請求アルカ又ハ必要ト思料ス
 ル場合ニ於テハ互ニ應援助力ス可シ

第二百四十五條 巡査憲兵卒ハ非番又ハ休暇中ト雖モ助力救
 護ノ請求アルカ又ハ現行犯准現行犯アルコトヲ認知シタル時
 ハ成ル可ク其職務ヲ行フ可シ

第二百四十六條 巡査憲兵卒ハ豫審判事檢事ノ指揮アル時ハ
 直ニ其事ニ從フ可シ本屬ニ非サル司法警察官ノ指揮ニ付テ
 モ亦同シ

第二百四十七條 巡査憲兵卒復命又ハ報告等ヲ爲スニ付テハ
 見聞ノ事實ヲ虚飾セス其現況ヲ申立ツ可シ

第一章 捜査ニ關スル職務

第二百四十八條 巡査憲兵卒犯人及ヒ罪證ノ探索ヲ爲スニ付
 テハ司法警察官ノ指揮ニ從ヒ擅ニ指揮以外ノ事ヲ爲ス可カ
 ラス

第二百四十九條 探索ヲ爲スニ付テハ人ノ家宅内ニ進入スル

捜査ニ關スル
 職務

ヲ得ス但戸主又ハ管守者ノ承諾アル時ハ此限ニ在ラス
第二百五十條 探索ヲ爲スニ付テハ如何ナル場合ト雖モ物件
差押ヲ爲スヲ得ス但所有者又ハ保管者ノ承諾ヲ得テ一時
之ヲ領置スルハ格別ナリトス

第二百五十一條 探索ヲ爲スニ付テハ如何ナル場合ト雖モ被
告人證人等ヲ呼出スヲ得ス

第二百五十二條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ現行犯准現行犯ニ
シテ被告人現場ニ在ル時ハ指揮又ハ令狀ナシト雖モ直ニ之
ヲ逮捕ス可シ但其事件輕微ニシテ且被告人逃走ノ恐ナシト
思料スル場合ニ於テハ之ヲ逮捕ス可カラス

第二百五十三條 前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕スルニハ人
ノ家宅内ト雖モ進入スルヲ得但戸主又ハ管守者ノ承諾アル
ニ非サレハ家宅ヲ搜索スルヲ得ス

戸主又ハ管守者ノ承諾ヲ得テ家宅搜索ヲ爲ス時ハ第二百六
十五條以下ノ手續ニ從フ可シ

第二百五十四條 現場ヨリ被告人ヲ追跡スル場合ニ於テハ其
追及シタル場所ノ如何ニ拘ハナス直ニ之ヲ逮捕スルヲ得
第二百五十五條 被告人ヲ逮捕スルニハ成ル可ク穩當ノ方法
ヲ用フ可シ

被告人兇器ヲ持シテ抗拒シ他ニ防禦ノ術ナキ場合ニ非サレ
ハ劍銃ヲ用フ可カラス
又暴行若クハ逃走ノ恐アル場合ニ非サレハ捕繩又ハ手錠ヲ
施ス可カラス

第二百五十六條 被告人多數ニシテ盡ク逮捕スルヲ能ハサル
場合ニ於テハ其首犯ト思料スル者ヲ逮捕スルヲ注意ス可
シ

第二百五十七條 巡查憲兵卒同時ニ同一ノ被告人ニ對シ逮捕ニ着手シタル場合ニ於テ其被告人常人ナル時ハ巡查ニ引渡シ軍人軍属ナル時ハ憲兵卒ニ引渡ス可シ

第二百五十八條 被告人ヲ逮捕シタル時ハ速ニ司法警察官ニ引致ス可シ

被告人兇器贓物又ハ罪証ト爲ル可キ物件ヲ携帯シタル時ハ速ニ之ヲ押收シテ司法警察官ニ送致ス可シ

第二百五十九條 被告人ヲ司法警察官ニ引致シタル時ハ其事由ヲ申告ス可シ被告人ヲ逮捕スルヲ能ハサル場合ニ於テモ亦同シ

第二百六十條 常人ニ於テ現行犯准現行犯ノ被告人ヲ逮捕シ之ヲ引渡サントスル時ハ速ニ之ヲ受取り前二條ニ從ヒ司法警察官ニ引致ス可シ

逮捕ノ原由又ハ逮捕ヲ爲シタル者ノ氏名住所分明ナラサル等ノ場合ニ於テハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ同行ヲ求ムルヲ得

第二百六十一條 罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪及ヒ違警罪ニ付テハ現行犯准現行犯ト雖モ被告人ヲ逮捕スルヲ得ス

前項ノ場合ニ於テハ被告人ノ氏名住所ヲ問ヒ證憑ヲ具シ當該官署ニ告發ス可シ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ犯罪ニ付キ被告人ヲ逮捕スルヲ必要トセサル時亦同シ

第二百六十二條 罰金以下ノ刑ニ該ル可キ現行犯准現行犯ノ被告人ト雖モ其氏名分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル時ハ當該官署ニ引致スルヲ得

第二百六十三條 現行犯ト非現行犯トヲ問ハス又被告人ヲ逮捕シタルト否トニ拘ハラス當該官ノ臨檢ヲ必要トスル時ハ

其場ノ原態ヲ保存シ見證人ノ散亂ヲ防キ速ニ司法警察官ニ報告ス可シ

原態ヲ保存スルヲ能ハサル場合ニ於テ便宜處置スルハ妨ケナシト雖モ必要ノ部分ヲ踰ユ可カラス

假豫審ニ關スル職務

第二章 假豫審ニ關スル職務

第二百六十四條 巡查憲兵卒假豫審ニ付キ令狀執行ノ命ヲ受ケタル時ハ其令狀ニ記載シタル所ニ從ヒ速ニ之ヲ執行ス可シ

第二百六十五條 令狀ヲ執行スルニ付テハ被告人發見ノ爲メ其家宅若クハ他人ノ家宅ヲ搜索スルヲ得但被告人潛匿ノ徵憑充分ナル場合ノ外濫リニ搜索ヲ爲ス可カラス

第二百六十六條 家宅ヲ搜索スルニハ戶長ノ立會アルヲ要ス若シ其差支アル時ハ隣佑二名以上ヲシテ立會ハシム可シ但

戶主又ハ管守者ノ承諾ヲ得テ搜索ヲ爲ス時ハ別ニ立會人アルヲ要セス

官署内ニ於テ搜索ヲ爲ス時ハ其長官又ハ其指名シタル者ノ立會アルヲ要ス

第二百六十七條 家宅搜索ハ日出前日没後之ヲ爲スヲ得ス但晝間搜索ニ着手シタル時ハ夜間ニ及ブモ妨ケナシ

戶主又ハ管守者ノ承諾アル時ハ何時ニ拘ハラス搜索ヲ爲スヲ得

第二百六十八條 芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日没後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間旅籠屋貸坐敷ハ日出前日没後ニ拘ハラス家宅ヲ搜索スルヲ得

第二百六十九條 被告人家宅内ニ潛匿シタリト思料スル場合ニ於テ即時ニ搜索ヲ爲スヲ得サル時ハ其逃亡ヲ防ク爲メ

相當ノ處置ヲ爲ス可シ

第二百七十條 家宅ヲ搜索スルニハ成ル可ク穩當ノ方法ヲ用
フ可シ且被告人潛匿シタリト思料ス可キ場所ノ外搜索ヲ爲
スヲ得ス

第二百七十一條 家宅搜索ヲ爲シタル時ハ被告人ヲ發見シタ
リト否トニ拘ハラス搜索調書ヲ作ル可シ

搜索調書ニハ搜索ヲ爲シタル年月日場所及ヒ時間其他搜索
ニ關スル一切ノ手續ヲ記載ス可シ

第二百七十二條 搜索調書ヲ作ルニハ第五百五十六條ニ從ヒ且
立會人ヲシテ署名捺印セシム可シ若シ立會人署名捺印スル
ヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

第二百七十三條 司法警察官ノ命ニ依リ令狀ヲ他ノ管轄地内
ニ帶行スル時ハ其地ノ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ執行ヲ求

ム可シ

若シ途中ニ於テ被告人ヲ撞見シタル時ハ其他ノ司法警察官
ニ同行シテ執行ヲ求ムルヲ得

第二百七十四條 第二百五十五條第二百五十六條及ヒ第二百
五十八條第二項ハ令狀ヲ執行スルニ付テモ亦之ヲ適用ス可
シ

第二百七十五條 令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ謄
本ヲ下付シ被告人ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム可シ若シ
署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

又其執行ノ年月日時場所及ヒ手續ヲ其二通ニ記載シ署名捺
印ス可シ若シ執行スルヲ能ハサル時ハ其事由ヲ正本ニ記載
ス可シ

令狀ヲ執行シタル時ハ其正本ヲ司法警察官ニ還納ス可シ若

シ執行スルヲ能ハサル時ハ正本謄本ヲ還納ス可シ

第二百七十六條 司法警察官ノ命ニ依リ召喚狀呼出狀ヲ送達スルニハ其一通ヲ本人ニ渡ス可シ本人ニ渡スヲ得サル時ハ其住所ニ於テ同居ノ親屬又ハ雇人ニ渡ス可シ同居ノ親屬雇人ニ渡スヲ得ス若クハ是等ノ者受取ルヲ肯セス又ハ白痴瘋癲幼年者日雇人ナル等ノ場合ニ於テハ其地ノ戸長ニ渡ス可シ

召喚狀呼出狀ニハ受取人ヲシテ其二通ニ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ又送達ノ年月日時場所及ヒ手續ヲ其二通ニ記載シ署名捺印ス可シ

召喚狀呼出狀ヲ送達シタル時ハ其一通ヲ司法警察官ニ還納ス可シ若シ送達スルヲ能ハサル時ハ二通ヲ還納ス可シ

○司法警察規則附錄 明治七年九月廿九日大 (現存)

外國公使及公使館屬員ノ事

第一條 外國公使ハ我國憲ヲ以テ羈縻スヘカラサル通義ナレハ是ヲ擴充スル時ハ其家族并ニ公使館屬員 書記官 隨員 公使 家族 及ヒ書記官ノ僕隸等總テ 及ヒ其家屋車馬迄モ同様ナリ 公使ノ名籍ニアル者ヲ云フ ト思量スヘシ

第二條 內國人公使館又ハ公使ノ書記官ニ備ハレ公使館ノ名籍ニ在ル間ハ公使館ノ屬隸ト見做シ若シ事故アリテ逮捕セサルヲ得サルカ或ハ呼出シテ糾問セサルヲ得サル時ハ外務省ヲ歷テ公使館ヘ報知シ其唯諾ヲ待テ後引出スヘシ尤其者ヲ處分スルハ公使ノ關係スルコトニアラス

第三條 內國人各公使館及書記官ニ備ハレ中ハ其公使又ハ代

理ヨリ其者ノ名籍ヲ外務省へ届出外務省ハ其届書ヲ速ニ司法警察官吏へ送達シ置へシ警察官吏ハ常ニ其姓名ヲ簿記シ置へシ若シ途中ニテ或ル人ヲ引留其名籍ノ在ル處ヲ聞糺ス時公使館ニ備ハレ中ト稱スル時其簿記ト校照シ愈相違ナキハ一旦公使館迄同道シ照會ヲ遂ケタル後其處分ヲ施スヘシ若其姓名簿記中ニ在ラサル者ニテモ其本人決シテ相違ナキ旨ヲ述ル時ハ公使館へ同道シ右ノ如ク處置スヘシ但シ重科ニテ捕縛セサルヲ得サル者ハ第六條ニ照シテ處分スヘシ

外國公使館ノ事

第四條 外國公使館内へハ事故アリテ館主ヨリ請求スル時ノ外決シテ立入ルヘカラス若シ重科ヲ犯シタル罪人ト見留タル者奔逃シテ門内へ隠入セシ等毫髮ノ間モ猶豫スヘカラス

外國公使館ノ事

外國公使館員
即チ犯シ并犯
罪ノ内國人公
使館ニ住居ス
ル時ノ事

ル時ハ其把門者ニ告ケ其館主ノ許可ヲ受テ後館内ハ又邸内ヲ探索スヘシ

第五條 右公使館書記官ノ住宅内ニ在ル内外屬員ハ勿論車馬家畜ノ末ニ至ル迄一切手ヲ觸ルヘカラス若シ職務上止ムヲ得ス手ヲ降スヘキ事故アラハ是ヲ外務省ニ打合セ而シテ其處分ヲ爲スヘシ

外國公使、屬員、罪ヲ犯シ并犯罪ノ内國人、公使館ニ

住居スル時ノ事

第六條 外國公使館ノ屬員ナル外國人殺傷或ハ剽盜放火強姦等目前ニ顯ハレタル罪ヲ公使館外ニテ現ニ行テ見及フカ或ハ現ニ見スト雖モ衆人ヨリ報告シ確証アリテ片時モ猶豫ナシカタキ時ハ其人ヲ其場ニ引留メ即刻公使館へ報知ノ上同館へ引渡シ又外務省へ報知シ是ヲ公使館ニ引渡セシ手續ヲ

申へシ決シテ手鎖捕縛等ノ事アル可カラヌ或ハ屬員ノ内國人ハ引留置即刻公使館へ報知シ改メテ彼ヨリ引渡ヲ受クルノ手順ヲ施シ又コレヲ外務省ニ申へシ

第七條 犯罪ノ風聞アルカ或ハ他人ノ白狀ヨリ明了ニ其罪科ノ知レタル内國人現ニ公使館内ニ備ハレテ公使館ニ住居スル片ハ其館外周圍ノ各路ヲ遮斷シ而後外務省へ報知シ同館へ照會ヲ乞館主ニ引渡シテ要求シ其人ヲ受取リテ后之レヲ捕縛ス可シ若シ館主之ヲ拒ムルハ其旨ヲ猶外務省へ報知シテ其處分ヲ定ムヘシ

命令執行ノ職務ヲ履スル人

(注意) 治罪法第三十四條第三項ニ依リ裁判所ノ命令及ヒ言渡ノ執行ノ指揮ハ檢事ノ職權ニ屬セシ處刑事訴訟法ニ其明文ナキヲ以テ事務執行上往々疑義ヲ生スルモノナキニアラス右命

已決犯罪表調製ノ事

令執行ハ裁判所構成法第六條ニ依リ當然檢事ノ職權ニ屬スルモノトス

(注意) 刑事訴訟法ニハ已決犯罪表ヲ調製スヘキ明條ハナケレト右ハ被告人前科取調上必須欠ク可ラサルノ要具ナレハ必スヤ全國裁判所ニ於テ從前ノ通り調製ス可キモノトス

郵便法送達執行停止ノ事

(注意) 司法省刑甲第二百五十二號

民事訴訟法第三百三十六條第三項ニ從ヒ郵便ニ依リ送達ヲ爲スニハ特別ノ規則ヲ要スル義ニ付右規則制定迄ハ郵便ニ依ル送達ハ之ヲ實行スヘカラサルモノトス但シ民事訴訟法第四百三條ニ從ヒ郵便ニ付シテ送達ヲ爲ス場合ハ此限ニアラス

山林田野盜若
ノ未打ノ論
僅ノ如ノ疾
病休業ノ子
タル如キ加
ノ情狀ナキ
罪ハ地方裁
所ノ檢事ヨ
部ノ檢事ヨ
ニ委託シテ
移付シテ
クヘン

(注意) 同

裁判所構成法第十六條第三條ニ刑法第二編第一章ヲ除キ其他ノ輕罪ニシテ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ若クハ附加セザル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其情第二ニ掲ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルコトヲ要セスト認メ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ヨリ區裁判ニ移付シタルモノトアル去レハ今此法文ニ拘泥シテ解釋スルハ區裁判所檢事右等ノ犯罪ヲ發見スルモ直ニ其裁判所ニ起訴スルコトヲ得ス一々其事件ヲ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事局ニ送付シ其移付ヲ待タサルヲ得サルカ如シ果テ然ラハ徒ニ手數ト費用トヲ要シ訴訟延滞スルノミナラス勾留ヲ受ケタル被告人ノ如キハ遠ク護送セラル、ニ至リ官民共ニ不便ヲ極ムルヤ必然ナリ蓋シ立法ノ旨趣ハ輕罪中ノ輕キモノハ官民雙方ノ便宜ノ爲メ接

明治十六年
司法省第五十七
號達

近ノ地ニ於テ裁判シ其落着ヲ速カナラシメントスルニ在リ左レハ衆人普通ノ感情ニ於テ同條第二號ニ掲ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルヲ要セスト認ムル犯罪例ハ山林田野ニ於ケル竊盜ニシテ其贓額寡少ナルモノ又ハ知人爭論ノ末毆打シテ僅々ノ日數間疾病休業ニ至ラシメタルモノ、類ニシテ加重ノ情狀ナキ犯罪ハ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事ヨリ豫メ其種類ヲ指定シテ區裁判所檢事ニ處分ヲ委託シ置キ以テ每件移付ノ爲メニ要スル往復ノ繁ヲ省ク様取計ハサルヘカラサルモノナリ但區裁判所檢事ニ於テ事件ノ摸樣ニ依リ二月以上ノ禁錮又ハ百圓以上ノ罰金ニ處スルコトヲ要スルト認ムルモノハ地方裁判所若クハ其支部ノ檢事ニ送付スヘキハ勿論ナリトス

(注意) 司法省第五十七號達 明治十六年
一月十七日

刑法第二編第一章ニ記載セル重罪輕罪ヲ犯スモノアリタルトキ
キ不容易儀ニ付右等ノ事件ニ關シ告訴告發アリタル時ハ速ニ
司法省へ申出へキモノトス

根室ニ於ケル
手續ノ便宜法
ノ消滅ノ

(注意) 札幌根室始審裁判所ニ於テハ明治十五年六月廿日第三
十號布告ヲ以テ當分ノ内治罪ノ手續便宜特別法施行セラレタ
ルモ刑事訴訟法發布セラレタルニ付テハ右便宜法ハ自然消滅
セシモノトス

實印ナキ者ハ
押印セシムヘ

(注意) 司法省丙第十六號達明治十六年
二月五日
本法中犯人證人等押印ノ條々實印無之者ニ限リ從來ノ慣例ニ
依リ押印セシメ得へキモノトス

醫師ノ犯罪

(注意) 司法省丁第四十一號達明治十二年八
月二十一日

醫師タル者醫業ニ達スル犯罪有之處斷シタルトキハ其都度該
宣告文謄本ヲ添へ内務省へ通知スヘキモノトス
獸醫タル者其業ニ關シ犯罪アリタルトキハ是亦該宣告文謄本
ヲ添へ農商務省へ通知スヘキモノトス

(注意) 司法省達明治十五年
三月六日

帶動者罪ヲ犯シ公權ヲ剝奪又ハ停止スルノ言渡アリタルキハ
其罪狀并刑名宣告文ノ寫ヲ以テ司法省へ可届出モノトス

帶動者ノ犯罪
シタル場合

但剝奪公權ノ者ハ勳記勳章并年金票共收奪ノ上司法省へ差
出スヘキモノトス
從軍記章ヲ有スル者犯罪ヲ爲シタルトキ又前段同一ノ手續
ニ依ラサルヘカラス

司法省丁第三十二號達

(注意) 司法省丁第三十二號達 明治十六年十一月十八日
 華族ノ^{位記ノ有無且月主}罪ヲ犯シ拘留セラレタル時ハ裁判所ヨリ直ニ宮内省へ通牒シ猶刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其宣告書ノ謄本ヲ添へ是亦同様速ニ通牒スへキモノトス(明治十六年十一月十八日)
 司法省丁第三十二號達

宮内省官吏ノ扶助料ヲ受ケル遺族ノ犯罪

(注意) 宮内省官吏准官吏恩給例同遺族扶助例改定ニ付テハ向後該省ヨリ恩給若クハ扶助料ヲ受クル者ニシテ重罪輕罪ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルモノアルトキハ確定判決ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ其時々同省へ通知書差出スへキモノトス

(注意) 明治十六年四月十七日 司法省第十五號大審院裁判所へ達

軍人ノ扶助料ヲ受ケル遺族ノ犯罪

陸軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル元軍人及其扶助料ヲ有スル寡婦孤兒罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ受ケ並ニ該恩給ヲ有スル軍人ニシテ公權剝奪若クニ公權停止ノ處分ヲ受ケタル者アル時ハ其都度直ニ大藏省へ通知スへキモノトス

司法省丁第一號達

(注意) 明治十八年六月十日 司法省丁第一號大審院裁判所へ達
 官吏及ヒ陸海軍恩給令ニ據リ恩給ヲ有スル者罪ヲ犯シ公權剝奪若クハ停止ノ處分ヲ爲シ又ハ扶助料ヲ受クル者罪ヲ犯シ禁錮以上ノ刑ニ處シタル時ハ直ニ其宣告文寫書ヲ添へ司法省へ届出へキモノトス

(注意) 司法省達 明治二十五年三月二十二日

舊治罪法ノ下ニ於テハ調査ヲ作りタル司法警察官ヲ證人トス

司法警察官ヲ證人トスル取

扱手續消滅ス

ルトキハ書記局ヨリ報知書ヲ以テ出廷セシメ宣誓セシムルニ及ハス書記ノ次席ニ着テ陳述セシメタルモ本法實施後ハ此取扱手續ハ自然消滅シタルモノトス

第四十六號布告

明治二十四年九月二十日

書類送達ニ付キ治罪法第二十四條ノ制限有之候ヘトモ當分ノ内ハ不及其儀候事

○ 治罪法第四十條ニ犯罪ノ地ヲ以テ裁判管轄ト規定有之候處當分ノ内犯罪ノ地分明ナル被告人ト雖モ管轄裁判所ヨリ囑託アリタル時ハ其被告人逮捕ノ地ノ裁判所之ヲ管轄スヘシ

○ 治罪法第七十三條第二項ニ陪席判事四名ト有之候ヘトモ當

分ノ内二名ト相定候事

○ 治罪法第一百一條ニ准現行犯ノ場合列記有之候處其舉動犯人ト思料スヘキ者アル時ハ當分ノ内現行犯ニ處分スルヲ得

○ 治罪法第三百三十三條第三項ニ家宅搜索ノ制限有之候ヘトモ芝居人寄席飲食店湯屋遊船宿待合茶屋ノ類ハ日出前日後ト雖モ其營業ヲ爲ス時間又旅籠屋貨坐敷ハ日出前日没後ニ拘ハラヌ搜索致シ苦シカラス

○ 治罪法第六十八條第七十二條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニモ囑託スルヲ得

○
 治罪法第二百五條第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スル
 一ヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限
 リ令狀ヲ發シ苦シカラス
 (右當分法ハ本法實施ノ爲メ自然消滅シタルモノナリ)

附錄

關係要則

畢

明治二十四年三月十六日印刷
 明治二十四年三月十九日出版

正價金三拾錢

版權
 所有

編輯者兼
 發行者

大橋新太郎

日本橋區本石町三丁目拾六番地

印刷者

內藤 祐

京橋區元數寄屋町一丁目一番地

發行所

博文館

東京市日本橋區本石町三丁目
 十六番地

大 賣 捌 所

京 都 奈 良 神 戶 名 古 屋 濱 松 府 甲 府 橫 濱 全 國 八 子 倉 佐 倉 水 戶 津 大 津 高 津 長 野 松 本 全 國 上 野 前 橋

便 利 堂 飯 田 信 文 堂 坂 田 一 郎 吉 岡 支 店 三 輪 文 次 郎 片 野 東 四 郎 谷 島 屋 源 三 郎 內 藤 傳 右 衛 門 丸 屋 書 店 里 見 亭 太 郎 熊 澤 傳 四 郎 吉 田 傳 左 衛 門 川 又 銀 藏 澤 一 二 郎 升 屋 重 兵 衛 島 津 協 和 堂 高 美 書 店 松 榮 堂 吉 宮 坂 日 新 堂 換 乎 堂

前 橋 高 崎 枋 木 全 國 枋 木 全 國 平 島 福 島 石 卷 登 米 盛 岡 青 森 全 國 八 子 倉 山 形 全 國 米 澤 全 國 秋 田 全 國 全 國

文 江 堂 換 乎 堂 宮 川 庸 三 郎 城 山 常 次 郎 清 光 堂 書 籍 店 萱 間 左 右 太 山 口 德 之 助 宮 崎 新 七 郎 東 崎 北 堂 鎌 田 商 店 野 崎 支 店 浦 山 政 吉 屋 八 文 字 屋 荒 井 太 四 郎 須 佐 權 平 素 月 晨 平 本 間 金 之 助 片 谷 同 盟 堂 鈴 木 秋 穗 堂 成 見 清 兵 衛 堂

特 別 大 賣 捌 所

大 坂 全 國 全 國 全 國 全 國 京 都 全 國 名 古 屋 神 戶 熊 本 仙 臺 全 國 弘 前 全 國 長 岡 水 原

吉 岡 平 助 柳 原 喜 兵 衛 梅 原 龜 七 松 村 九 兵 衛 岡 嶋 真 七 東 枝 律 書 房 大 黑 屋 書 舖 川 瀨 代 助 熊 谷 久 榮 堂 長 崎 次 郎 木 村 文 助 佐 勤 書 店 文 學 館 野 崎 九 兵 衛 宮 本 甚 兵 衛 大 橋 書 房 西 村 六 平

金 澤 四 日 市 津 市 靜 岡 府 甲 府 全 國 長 野 松 本 鹿 兒 嶋 全 國 長 野 全 國 大 分 岡 山 廣 島 松 江 山 口

雲 根 堂 伊 藤 善 太 郎 河 嶋 九 右 衛 門 廣 瀨 市 藏 柳 正 堂 源 太 郎 五 明 堂 正 八 西 澤 喜 太 郎 水 琴 堂 富 山 仲 吉 堂 吉 田 幸 兵 衛 鶴 野 書 店 安 中 半 三 郎 山 川 正 三 郎 武 內 彌 三 郎 松 村 善 助 川 岡 清 助 清 水 一 二 三 堂

大 賣 捌 所

秋田酒橫福全武小七富全高全新高全長全高全三村

田田手井生松尾山岡濁岡田上條

新田目 鈴木喜太郎
 大澤忠四郎
 品川太右衛門
 武內市藏
 安立庄三郎
 宇都宮源平
 大來堂
 清明堂
 中田書店
 學海堂
 車次郎
 林富吉
 櫻井產作
 上田屋治平
 目黒十郎
 室橋直三郎
 高橋書店
 備前屋竹八
 繩口書舖

相川 鳥取 全山 津山 和歌山 德島 高知 博多 久留米 中津 大分 佐賀 鹿島 函館 全差 江樽 小島 札幌 全室

幅野長藏
 橫山安次郎
 山本吉太郎
 仁科久造
 平井文助
 阪井萬吉
 澤本駒吉
 林本斧介
 菊竹儀平
 野依曆三
 甲斐治平
 河內汲古堂
 山元正治
 魁文社
 愛新軒
 辻二八
 白島書店
 前野長發
 津田教助
 伊藤直三郎

28
2
10

